ISSN　0286-5424

京都府埋蔵文化財情報

第107号

調査抄報　長岡京市伊賀寺遺跡出土の火葬墓について----------岩松　保・大藪由美子 -----1
調査報告　向日市石田遺跡出土の縄文時代資料 ----------渡辺　誠------9
平成20年度発掘調査略報----------25
　　1．俵野廃寺第３次
　　2．長岡京跡左京第527次
　　3．新庄遺跡第５次
　　4．戸田遺跡
遺跡でたどる京都の歴史４　飛鳥・奈良時代の京都----------32
長岡京調査だより・103----------41
普及啓発事業----------43
センターの動向----------47

2008年12月

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

巻頭図版１解説

木津川市木津に所在する馬場南遺跡の奈良時代中期～後期の流路跡から出土した「阿支波支乃之多波毛美智ヵ（以下欠損）」との墨書がある木簡。通常の木簡よりも一回り大きく、歌を詠むために作られたものと考えられる。記された歌は、万葉集（巻10）にある「秋萩の下葉もみちぬあらたまの月の経ゆけば風をいたみかも」（「はやみ」の別解あり）の一部分と判断される。万葉集の歌が記された木簡としては、滋賀県紫香楽宮跡・奈良県石神遺跡に次いで３例目である。

全長23.4cm、復元長60cm余。

巻頭図版１　馬場南遺跡出土万葉木簡

巻頭図版２　伊賀寺遺跡の火葬墓

（1）火葬墓ＳＫ 03 全景（南から）

（2）火葬墓ＳＫ 26 全景（南東から）

長岡京市伊賀寺遺跡出土の火葬墓について
―縄文時代後期における死直後に焼かれた火葬の事例―

岩松　保・大藪由美子

１．調査の概要

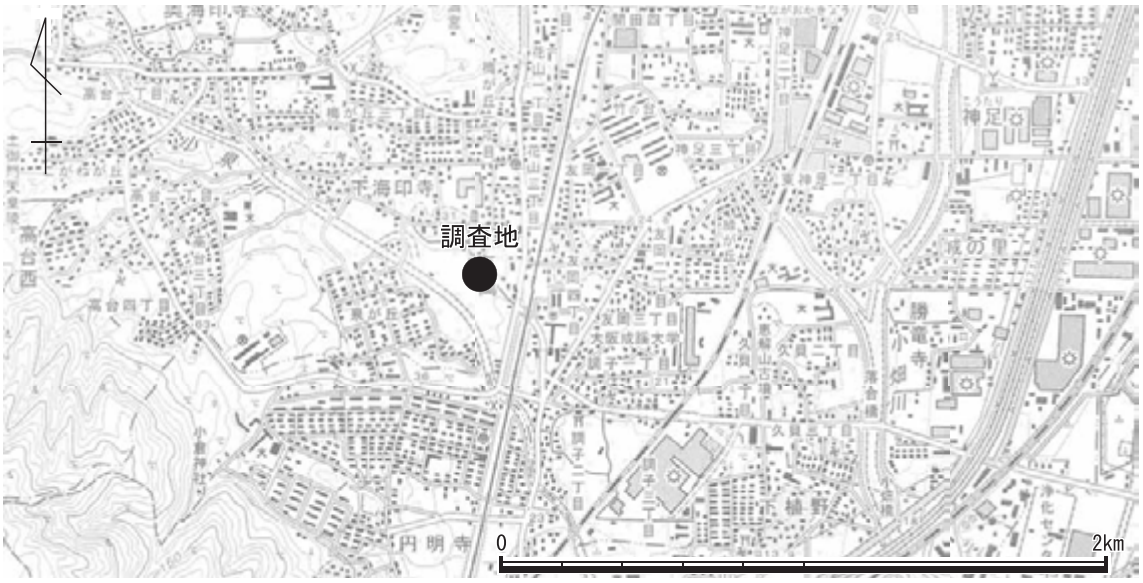
今回の調査は、長岡京市下海印寺下内田地内で実施したもので、府道改良工事に伴う事前調査である。長岡京の復元によると右京七条三坊十二町（新条坊呼称で右京八条三坊十町）に位置し、同時に伊賀寺遺跡内に所在している。長岡京跡右京第943次調査（7ANOOD-6）として実施した（第１図）。

調査は、農業用水路の関係で３つのトレンチに分けて行った。総調査面積は1,045㎡である。１トレンチでは、庄内期の竪穴式住居跡２棟、土坑２基、２トレンチでは、縄文時代後期の竪穴式住居跡２基以上、土壙墓16基、火葬墓２基、古墳時代後期の溝・ピットを検出した。３トレンチでは、縄文時代中期後半の炉跡を有する竪穴式住居跡１基、縄文時代～古墳時代のピットを検出した（第２図）。

火葬墓ＳＫ03・26を検出したのは２トレンチ南半で、周辺では縄文時代の竪穴式住居跡ＳＨ01・25、土壙墓と判断される土壙16基を検出した。いずれも縄文時代後期後半（元住吉山式）のもので、遺構の重複の先後関係から、住居→土壙墓→火葬墓の順に土地利用されたものと推定される。この抄報では、縄文時代後期後半の火葬墓と出土人骨について報告したい。

火葬墓出土の人骨の鑑定は、京都大学大学院理学研究科自然人類学研究室片山一道教授にお願いし、同研究室の大藪由美子が中心となって行った。その結果、“新鮮骨”を焼いた火葬骨であるという興味深い事実が明らかとなった。

第３節の人骨の鑑定については、大藪由美子が、それ以外については岩松が執筆した。

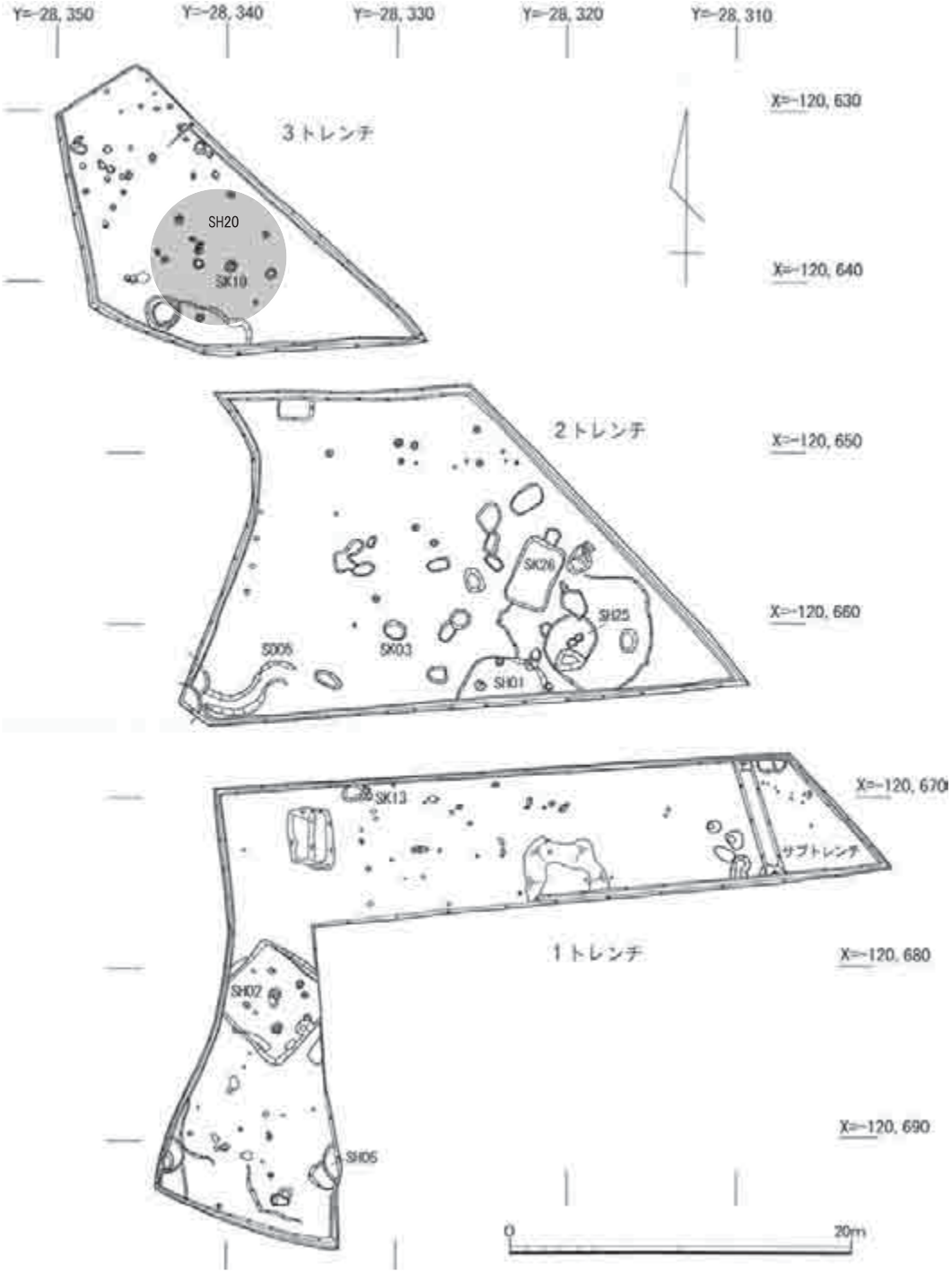


第１図　調査地位置図

２．火葬墓の調査

①火葬墓ＳＫ 03（巻頭図版２－（1)、第３図）

火葬墓ＳＫ 03 は２トレンチの中央やや南寄りで検出した。平面形は卵形を呈しており、長径 124cm、短径 105cm、深さ 50cm の坑に多数の人骨片が納められていた。骨は細片となっており、一部大きな骨が並べたようになっていたが、一見してバラバラな状態であった。第３節にあるように、高温で焼かれたもので、新鮮な空気を十分に取り入れて焼成された人骨と考えられる。ま



第２図　遺構配置図（国土座標は日本測地系）

た、土壙内部の壁面には火を受けた痕跡は認められず、第３・４層の焼土は砕かれた状態であり、他処から移設された状況であった。以上のことから、地表で薪木を組み上げて、遺骸を焼いた後に、骨や焼土を土壙に納めたものと推測された。

土壙の内部には、まず最下位に第５層の茶褐色土を 10 ～ 20cm、その上に焼土・炭が多く混じる第３・４層が 10cm 程度あり、その上位に骨片を多く含む第２層の暗茶褐色土が 25cm 程度堆積していた。比較的大きめの人骨が並べられていたのは第２層上面である。この上面に注口土器１点を置いており、これを埋める第１層の暗褐色土にもわずかながら骨片が含まれていた。

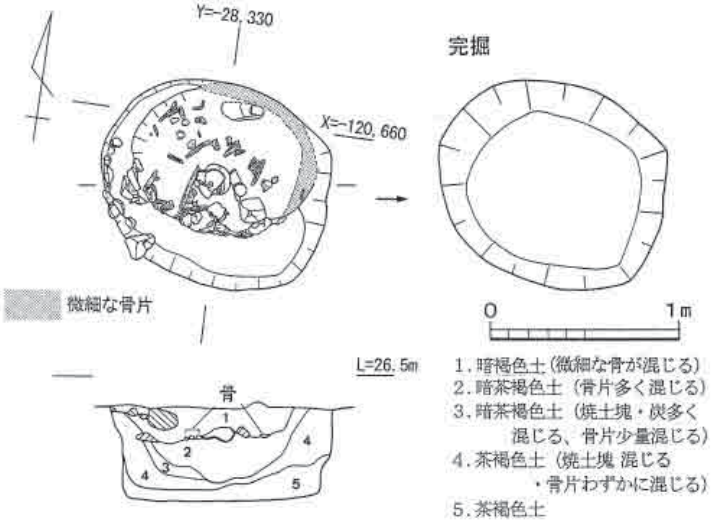
第３・４層の焼土にわずかに骨片が混じることから、遺骸を焼いた場所の焼土を削り取って埋めたと判断される。第２層は微細な骨片・骨・炭化物が多く混じり、焼土がほとんど混じらないことから、火葬終了後、地表に堆積した炭化物・骨を納めたものと判断される。第２層上面には比較的大きめの骨が並べられていたので、最初に大きな骨だけを集め置いたのであろう。第１層にも微細な骨片が含まれていたが、その量もわずかであることから、意図的に骨を混入したものではなさそうである。

この土層の解釈より、次のような手順で土壙内に骨・焼土が埋め置かれたものと推測される。

遺骸が地表上で十分に焼かれた後、熱が十分に冷めた段階で、まず比較的大きな骨だけが取り上げられる。次いで、地表に積み上がった炭と骨片を取りのけて、赤く焼けた土を露わにし、焼土を掻き取る。坑を開け、まず、第５層の茶褐色土を入れるが、炭・骨・焼土は混じっていないので、坑を掘った土砂で整地したものであろう。その後、取り置いた焼土・炭（第３・４層）、骨（第２層）の順に埋めていく。大きめの骨を納めた後に、注口土器を割って置くが、この土器の上にも長管骨の一部が置かれていた。この注口土器内には骨は入っておらず、炭化物と焼土が入っていた。最後に、土壙を掘削した土砂（第１層）で埋めるが、この中にも微細な骨片がわずかながら混じっていた。坑を開けて土砂を坑の横に取り置いた際に､骨が混じったものであろう。

また、第２～４層の焼土・炭と骨は、断面土層でその堆積状況を見ると、下に向けてＵ字形になっている。そのため、第２層が上方まで立ち上がり、検出平面図（第３図左上）の網点部分に微細な骨片となって認められた。このような堆積状況になるには、それぞれの土を土壙の壁に貼り付ける必要があるが、実際にはどのようにしたのかよく分からない。

内部からの出土遺物には、注口土器１点と石鏃２点、緑色の碧玉片、その他に土器片がある。注口土器は、注口部分とその真後ろの頸部から口縁部にかけてが欠損しており、埋土中にはその破片の一



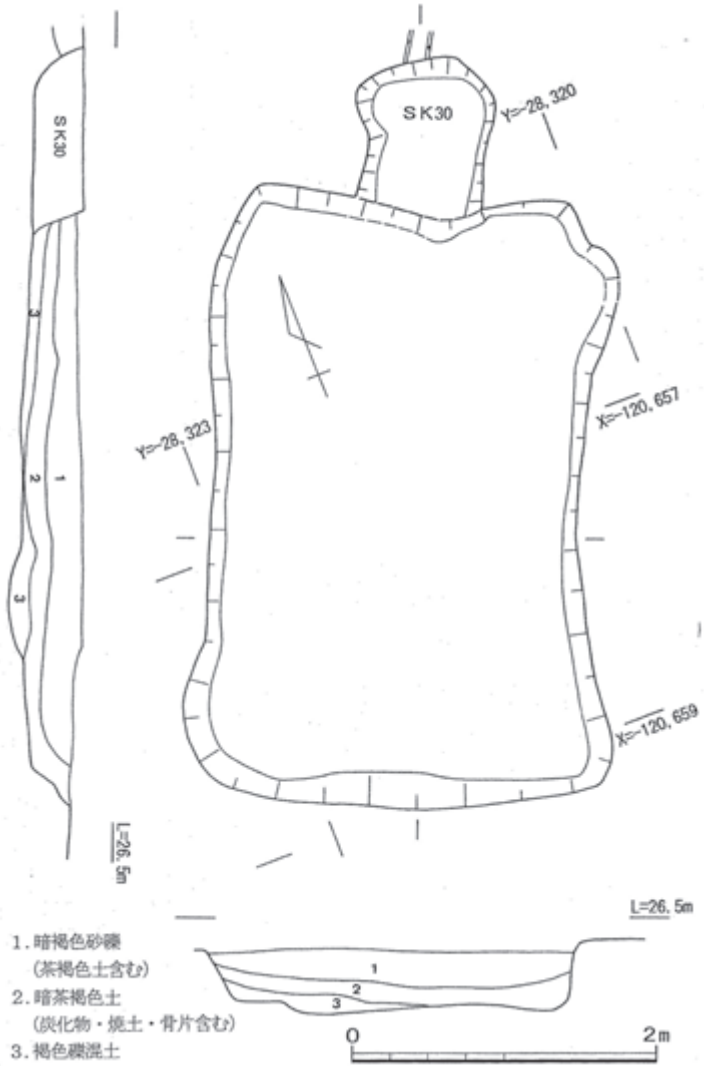
第３図　火葬墓 SK03

部が見つからなかったことから、意図的に打ち欠いたものであろう。他の土器片はいずれも数 cm 程度のものばかりで、意図的に埋納されたものではなく、混じり込んだものと判断される。石鏃はいずれも破損品である。碧玉片は５～８mm 程度の大きさであるが､穿孔は認められない。破損品であるのか、不明である。また、可能な限り同定作業を行ったが、動物骨は確認できなかった。

土壙内の土砂を洗浄した結果、回収した人骨の総重量は約 10kg である。注口土器内から出土した炭化物の放射性炭素年代は、暦年較正年代（１σ）が 1608 ～ 1570B.C（23.8％）、1561 ～ 1497B.C（44.4％）である。

②火葬墓ＳＫ 26（巻頭図版２－（2)、第４図）

火葬墓ＳＫ 26 は平面形が長方形を呈しており、その規模は 405 × 285cm（最大)、400 × 240cm（中央)、深さ 40cm（最大 50cm）である。埋土は下から、褐色礫混土、暗茶褐色土、暗褐色砂礫が堆積しており、第２層の暗茶褐色土は厚さ 10 ～ 15cm で、焼土・微細な骨・炭が多量に含まれていた。この層は土壙の全面に広がっているが、焼土・微細な骨・炭化物は平面的に見ると４ないし５群に分布している。それぞれの群には、火葬墓ＳＫ 03 と較べて微細な骨が散らばった状態であり、当初は人骨と鑑定できなかった。しかし、土壙の西南部では頭蓋骨・下顎骨・肋骨・椎骨・肩甲骨・四肢長管骨・手骨・足骨といったヒトの全身の骨が、30 × 12 × 12cm の中に、四肢長管骨の長軸を揃えた状態で見つかった。骨は１体分に満たないものである。この例から、焼土・炭化物と一体分の骨を一ヶ所に集め置くというのが、火葬墓ＳＫ 26 における埋納方法であったと復元できる。先の骨片・焼土・炭の分布の群は、それぞれが一体分の遺骸を埋納した痕跡であると理解できる。



第４図　火葬墓 SK26

内部の石や土壙の壁面が焼けていないこと、焼土は小さな塊となって砕かれた状態であること、炭・人骨・焼土が層序をなして堆積し

ていないこと、先述の人骨が人為的に集められた状態であることから、他処で火葬された骨・炭化物・焼土が土壙内に納められたものと判断した。

埋土中には縄文土器片が比較的多く混じるが、火葬墓ＳＫ03とは異なり、意図的に埋納されたものは確認できなかった。洗浄土中より、碧玉製玉（穿孔のあるもの）４点（半裁品）、同石質の小破片２～15mm程度のものを10数点を回収した。着装されていたのかどうか、副葬品であるのか、混入品であるのか、検討中である。また、石鏃４点が出土したが、いずれも一部分が破損したものである。このほかに、サヌカイトの剝片が多く回収できたが、混入品であろう。

土壙内の約１／２の土砂を洗浄して回収した人骨の総量は約１kgである。土壙内から出土した炭化物の放射性炭素年代は、暦年較正年代（１σ）が1609～1514B.C（68.2%）である。

３．人骨の鑑定

①火葬墓ＳＫ03

出土した人骨は断片的で、いずれも焼かれたものばかりである。１cmに満たない破片については人骨か獣骨であるのか同定することは困難であったが、２～３cm程度の小断片では人骨と同定できるものが確認できた。頭蓋骨から足の指骨までほぼ全身の骨が残存するが、いずれも部分的で保存状態は良くない。また、骨は灰白色や白色に変色するまで焼かれており、収縮や変形が著しい。歯牙も数点含まれており､いずれもエナメル質が脱落し象牙質が露呈した状態である。

残存骨にはいくつか重複する部位が確認でき、最も多いのは下顎骨右側の歯槽部分で９点分重複している。さらに、これら重複する骨よりも明らかに若い子供の軸椎や尺骨が確認できることから、少なくとも10体分の人骨が残存すると考えられる。

性別を確実に判別できる部位は確認できない。しかし、男性骨の可能性が高い、眉上隆起が発達した前頭骨、外後頭隆起が発達した後頭骨、厚く大きな胸骨柄、筋肉付着部の発達した太い上腕骨が残存する。また、女性骨の可能性のあるものには、眼窩上縁の鋭利な前頭骨、外後頭隆起の発達が弱く薄い後頭骨、華奢な頬骨、細く華奢な上肢骨を確認できる。いずれの骨についても保存状態が悪いため、性別に関しては可能性を示すにとどまる。

大多数の骨は成人のものであり、数点子供の骨を確認できる。成人骨の中には、詳細な死亡時の年齢を推定できるものが数点のみ含まれる。一つは寛骨の破片で、仙骨との関節部分である耳状面の形態から壮年（25～40歳）程度の人のものと判明した。他には数点の頭蓋骨片があり、縫合線の内板部分のみが癒合しているのを確認できたことから、壮年以上の人の遺骨と推測できる。子供の骨は、下顎骨、軸椎、尺骨それぞれの断片からのみ死亡年齢を推定できた。下顎骨は、関節突起のサイズから10代後半あたり、軸椎は、棘突起の癒合が完了していることとサイズから４才前後を死亡時の年齢と推定する。尺骨は、近位関節部分の形態とサイズ、さらに焼成による骨収縮率を池田（1981）、Thompson（2005）を参考に最大30%と計算して考えると、おおよそ１歳前後から５歳程度までの範囲に死亡時の年齢を想定することができる。他に子供の骨と同定できるものはなかったが、子供の骨は成人骨よりも脆く壊れやすいので、多量に残存する破片

の中に含まれている可能性は十分ある。

病変としてあげられるものに変形性関節症の疑われる下顎骨がある。２点確認でき、いずれも関節突起が前後方向に薄くなり変形している。その他、病変ではないが、生前における歯の脱落痕を３個体分の下顎骨に確認できる。いずれも、切歯から第１小臼歯あたりの歯槽が部分的または全体的に吸収している。縄文人の抜歯風習はよく知られるところであり、これら下顎骨の事例も風習的な抜歯によるものかもしれない。

焼成により骨表面に深い亀裂が入り、頭蓋骨などの扁平骨は反り返り、長骨では長軸方向や横方向の輪状の割れやよじれが生じている。こうした特徴は、Stewart（1979）や池田（1981）を参考にすると、軟部組織の残る新鮮骨の時に焼かれて起こる特徴とある。また、焼成温度の違いによる骨の色調変化が指摘されており、比較的低い温度（200℃から 300℃）で焼かれた骨は茶色や黒色であるが、高温（800℃）で焼かれた骨は青灰色や白色になるとある（Buikstra and Ubelaker, 1994）。また、歯牙においては焼成温度が約 500℃以上になると、エナメル質部分が剥離し象牙質が露呈した状態となる（Buikstra and Goldstein, 1973）。残存骨の色調は、灰白色や白色を呈しており、歯牙ではエナメル質が全て脱落して象牙質が露呈した状態にあるので、高温で焼成したと考えられる。以上のことから、火葬墓ＳＫ 03 の遺骸は死後それほど経過する間もなく高温で火葬されたと推定できる。

②火葬墓ＳＫ 26

焼かれて変形した人骨が断片や破片となって残る。頭蓋骨・下顎骨・肋骨・椎骨・肩甲骨・四肢長骨・手骨・足骨を同定できたがいずれも部分的にしか残らない。重複する部位はなく、別個体と考えられるような異なった特徴をもつ部位も確認できないことから、少なくとも１個体分の人骨がある。性別は、保存状態が悪いためわからない。比較的残りの良い四肢長骨では、骨端が癒合し、骨体のサイズが大人並みに大きいことから、成人の遺骨であることは判明したが、破片となった骨については死亡時の年齢は不明である。

骨は灰白色や白色に変色し、四肢長骨には長軸方向や横方向の深い亀裂、捩れが認められ、頭蓋骨や肩甲骨などの扁平骨や椎骨の表面にも深く亀裂が生じている。こうした特徴から、火葬墓ＳＫ 26 の遺骸は軟部組織が残る新鮮骨の状態にあるとき、すなわち死後それ程時間が経たないうちに高温で火葬されたと推測できる。

４．まとめと課題

以上、伊賀寺遺跡で検出した火葬墓とその人骨について述べてきた。その特色をまとめると、

①他の場所、おそらく平地の上に火床を作り、そこで遺骸を高温で焼いている

②死骸はすべて骨が新鮮な状態の時に火葬されている

③火葬墓ＳＫ 03 では 10 体以上、火葬墓ＳＫ 26 では１体以上、おそらく４～５体以上の骨が納められている

④火葬墓 SK03 では４歳前後 10 代後半以降の２体子供と成人８体・火葬墓ＳＫ 26 では成人１

体である

⑤埋葬された人骨の男女比は不明である

⑥焼いた骨とともにその際の炭化物、その下位にある焼土を掘り返して埋めている

⑦火葬墓ＳＫ03と火葬墓ＳＫ26から出土した炭化物の放射性炭素年代は、同時期である

という点である。以下、人骨から推定される考古学上の問題点を検討したい。

まず、火葬墓ＳＫ03と火葬墓ＳＫ26は、放射性炭素年代によると同時期のものである。

しかし、火葬墓ＳＫ03と火葬墓ＳＫ26では、人骨を埋納する方法が異なっている。火葬墓ＳＫ03では、10体の人骨がまとまりもなくバラバラになって埋納されているのに対して、火葬墓ＳＫ26では、一個体の人骨・焼土・炭化物を集め置いている。これらの違いが何を意味するのかはわからない。

火葬墓ＳＫ03は、副葬品としての土器が最上位に置かれていることや土層の間に流入土が認められないことから、最低でも10人の人骨が同時に埋納されたことは間違いない。火葬墓ＳＫ26は、１体分の人骨しか確認できなかったが、複数の人骨を埋納したことは明らかで、土層の観察では第２層中に間層が認められないことから、さほど時間の経過を経ずしてこれらの人骨が納められたと推定される。火葬墓ＳＫ03・26のいずれも、同時もしくはほぼ同じ時期に火葬骨が納められたことは間違いない。ここで問題なのが、これらの人々がほぼ同時に亡くなったのかどうかである。

骨の状況から、新鮮骨を高温で焼いていることは間違いなく、焼いた骨がこのような状態になるには、骨が乾燥しにくい冬でも数ヶ月以内、一冬を越えた骨・遺骸では無理であろうとのことである（片山先生私信）。

火葬骨が合葬された経緯については数案が考えられるが、発掘調査の知見からは、いずれであるかの決め手に欠く。

まず、①案として、数ヶ月以内に少なくとも10数人が亡くなり、２回に分けて火葬を行ったという可能性がある。もし疫病等でほぼ同時に10数人が亡くなるという異常事態があったとすれば、10数人が亡くなった上に彼らを火葬するだけの人員が、伊賀寺遺跡周辺に居住していたと想定することができる。これが一集落なのか､集落の連合したものであるのかは分からないが、当時の乙訓地域における縄文社会を復元する上で重要な情報となろう。

②案として、遺骸をそのまま土壙内に納めるのではなく、その都度、火葬をしてから土壙に納め、後に土壙を掘り返して、10数体分の火葬骨を集めたという考えである。調査の概要では触れなかったが、土壙墓ＳＫ27の埋土中に焼土・炭がわずかながら含まれており、火葬骨を納めた可能性が指摘できる。しかし、火葬骨を納めた墓を掘り返して骨や焼土を集めた場合、それらを再埋葬すると、骨や焼土には土砂がブロック状に混じったり、骨と焼土・炭をきれいに分けられないと考えられるが、火葬墓ＳＫ03の第２層や第４層は焼土と炭がきれいに分かれている。そのため、火葬墓を掘り返して、複数人の骨を合葬したとは考えがたい。

③案として、別々に亡くなった人々をその都度火葬にした上で、焼骨を甕等に入れて保管し、

10 数体分集まった時点で２基の墓に合葬したという可能性がある。個々の骨を別個に保管すれば、骨層の中に不純物が混じらないことも納得できる。この場合、火葬墓ＳＫ 03 では最終時に火葬された焼土を土壙内に入れればよいので、それ以前のものは炭混じりの骨だけを保管しておけばよい。しかし、火葬墓ＳＫ 26 については、人骨・焼土・炭のまとまりが４～５群あることから、それぞれの人骨毎に炭・焼土も保管している必要がある。

これらの３案のうち、いずれであるか、またそれ以外の可能性があるのかは、今回の事例だけでは決めがたく、類例の増加をまって検討したい。

縄文時代の葬制は、土壙墓・土器棺墓が一般的であり、火葬は比較的珍しい。縄文時代の火葬についてまとめた花輪宏氏は、全国で 70 遺跡近くの火葬骨を集成した上で、縄文時代の火葬骨は骨化が進んだ段階で焼かれていることを指摘し、再葬を行う際に、土壙墓から掘り出した骨に肉が遺存していた場合、肉を無くして骨だけにするために火葬が行われたと考えた（花輪 2003）。

伊賀寺遺跡の事例は、それとは異なり、亡くなった直後に火葬されたものである。こういった葬送内容が伊賀寺遺跡だけで執り行われたとは考えがたく、全国の火葬墓の事例の中に位置づけていくべきものと考える。

そのためにも、過去に報告された事例もまた、“死後さほど時間が経ていない段階で火葬されたのか、否か”という視点で再検討する必要があるものと考える。そして、その作業を通じて、縄文時代における火葬の評価、ひいては再葬墓の評価を見直すことになるのかも知れない。

謝　辞

動物骨の有無については独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所松井章・丸山真史氏にお願いした。縄文火葬墓については京都大学泉拓良・千葉豊・富井眞氏、島根大学山田康弘氏のご教示を得た。ここに記して感謝いたします。

参考文献

Buikstra J.E. and Goldstein L.（1973）The Perrins Ledge Crematory. Illinois State Museum Reports of Investigations, 28:1-40.

Buikstra J. E. and Ubelaker D. H.（1994）Postmortem Changes: Human Taphonomy. In: Buikstra J. E. and Ubelaker D. H.（eds.）, Standards for Data Collection from Human Skeletal Remains: Arkansas Archeological Survey Research Series No.44. Arkansas, pp.95-106.

池田次郎（1981）出土火葬骨について .『太安萬侶墓』奈良県史跡名勝天然記念物調査報告書 , 43: 79-88.

Stewart T. D.（1979）Burned Bones. In: Thomas C.C.（ed.）, Essentials of Forensic Anthropology. Springfield, pp. 59-68.

Thompson T.J.U（2005）Heat-induced Dimensional Changes in Bone and their Consequences for Forensic Anthropology. Journal of Forensic Sciences, 50(5):1-8.

花輪宏「縄文時代の『火葬』について」『考古學雑誌』第 87 巻第４号　日本考古學會　2003

（いわまつ・たもつ　当調査研究センター主任調査員）

（おおやぶ・ゆみこ　京都大学大学院理学研究科自然人類学研究室）

向日市石田遺跡出土の縄文時代資料
－長岡京跡左京第10次調査（7ANDLD地区）出土資料－

渡辺　誠

１．遺跡の位置と資料の概要

遺跡の所在地は、行政区画上は京都府向日市石田９－１・10－１・11－１番地であり、この付近ではほぼ南北方向のＪＲ東海道本線東側の水田中に位置している。向日町駅の南方約600ｍ、向日町操車場の北方約400ｍの地区である。旧地形は不詳であるが、低地のなかの微高地であったと考えられる。

ここで報告する資料は、京都府教育委員会による昭和51年12月の緊急発掘（石田遺跡第１次調査）の出土品を主とするが、遺跡のパトロールを熱心に行っておられた故杉江義郎氏の採集品も少なくない。また少量ながら梶晴雄氏の採集品も含まれている。これらを発掘資料と採集資料とに分けて報告することとする。昭和52年11月～53年２月に行われた長岡京跡左京第14次調査の含まれるところの、南に続く地区の調査を、石田遺跡第２次調査とする（戸原・渡辺他2003）。

まず発掘資料から報告するが、この時の発掘資料のうち大多数を占める長岡京時代の遺構・遺物については、すでに高橋美久二氏（1977）によって報告されている。

当時、（財）古代學協會の平安博物館に勤務していた筆者は、昭和48年に京都府舞鶴市桑飼下遺跡を発掘し、西日本の縄文遺跡の立地条件として低地の重要性を追求していたため、積極的に協力させて頂いた。調査以前から縄文土器の出土は知られていたし、故中山修一先生にも御配慮頂きながら、地権者の了解が難しく発掘を断念した経緯もあった。

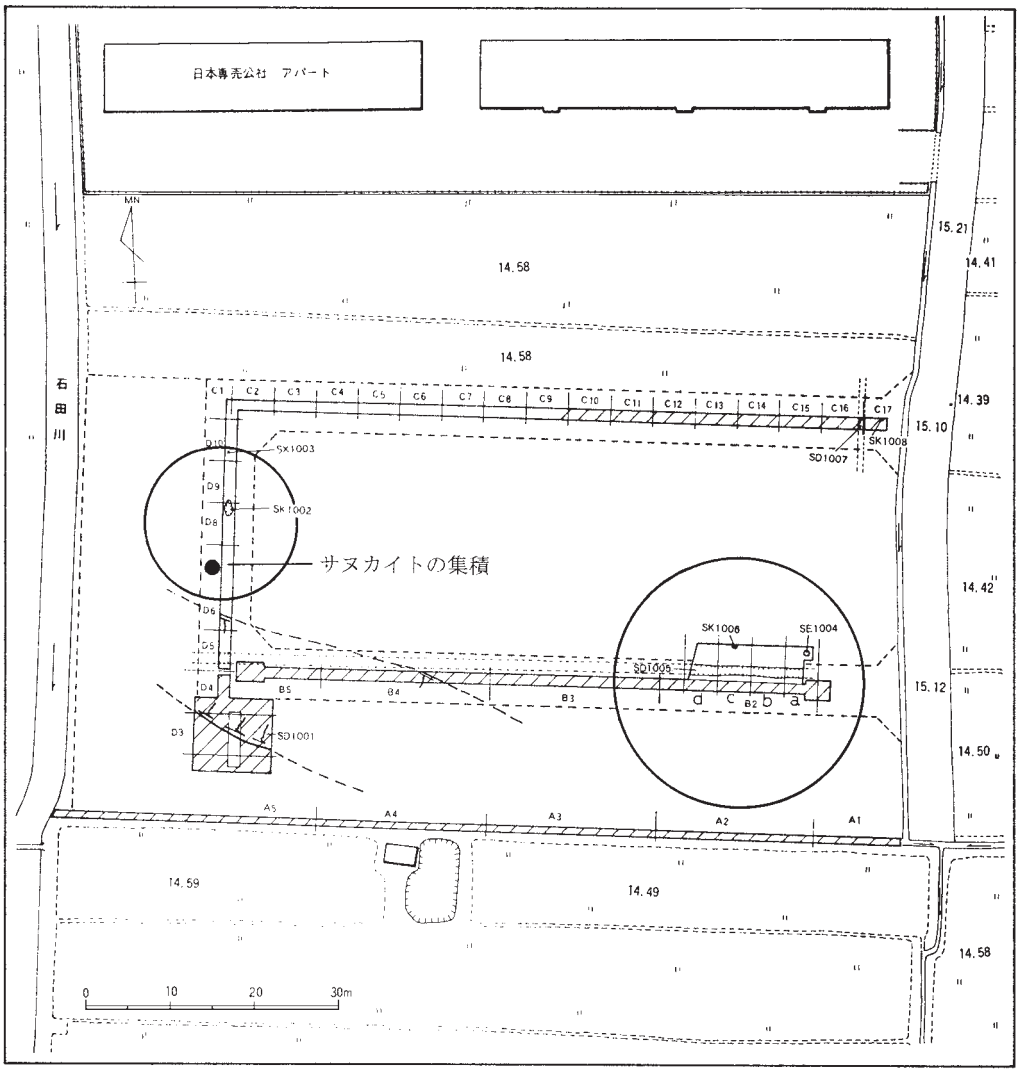
しかしその後、名古屋へ変わったりしたため報告が大変遅くなり、種々御教示・御協力下さった高橋美久二氏、および向日市教育委員会などの関係各位には、お詫び申し上げる次第である。

２．調査経過と層序

昭和51年の初め、長岡京域から東方へ外れた地点で、民間の宅地造成工事が行われている旨の連絡が、市民から京都府教育委員会にあった。当時京都府教育委員会に勤務していた高橋美久二氏が早速現地調査をしたところ、擁壁工事や汚水管工事によって掘り上げられた土に、多量の縄文土器と長岡京時代の土器・瓦などが含まれていた。

そこで工事の施工主・施工業者と協議して、国庫補助事業として京都府教育委員会による緊急発掘調査が実施された。具体的には、すでに掘削した部分については揚げ土から遺物を採集すること、断面図を作成すること、そして今後掘削する部分については工事を中断しながら発掘調査をすること、盛土する部分で必要な部分を一部試掘調査することであった。

調査はまず、現在掘削されている部分の揚げ土の土器片を採集することと、断面実測を行うこ



第１図　調査地区割り図（○印は遺物集中区）

とからはじめた。南辺の擁壁部分をＡ区、南辺道路部分をＢ区、北辺道路部分をＣ区、西辺道路部分をＤ区と名づけた。立合調査部分であるＡ・Ｂ区については造成計画に従って 20 ｍ間隔で遺物採集を行うこととして、東からＡ１～Ａ５、Ｂ１～Ｂ５区に地区割をした。発掘調査部分であるＣ・Ｄ区については、幅１ｍで長さ５ｍ毎にＣ区は西から、Ｄ区は南からそれぞれＣ１～Ｃ17、Ｄ２～Ｄ 11 区まで地区割を行った。さらに、断面観察の結果からもっとも遺物の集中するＢ２区で､幅２ｍ､長さ 13 ｍにわたって試掘調査を行った。Ｂ２区ではＢ区の基点（マンホール）から西に向かって４ｍ毎に区画割を行い、Ｂ２ａ～Ｂ２ｄと名づけて調査を行った（第１図）。

発掘調査地での基本的な層位は、地表下 20cm までが黒色土の水田耕土、その下に 20 ～ 30cm の黄褐色の鉄分が混じった灰色粘土層の水田床土（第Ⅰ層）、その下に 10 ～ 15cm の黒色粘質土層（第Ⅱ層）、その下に 10cm 前後の灰褐色砂質土層（第Ⅲ層）、その下の地表下約 80cm 以下が青灰色砂層（第Ⅳ層）である。第Ⅱ層が長岡京時代の遺物包含層で、第Ⅲ層が縄文時代の遺物包含層である。第Ⅳ層ではそのごく上部の第Ⅲ層との境付近にのみ縄文土器をわずかに含むが、それ以下はまったく遺物を含まない。

この基本層序は地区によってかなり変化し、Ｃ４～Ｃ９区付近では第Ⅱ層以下がほとんどなく、第Ⅱ層の下にすぐ砂礫層があらわれ、その間に長岡京時代土器片と縄文土器片が混在している。またＤ７～Ｄ９区付近や、Ｂ２区付近では第Ⅲ層が厚く堆積して多量の縄文土器片を含むが、それらから離れるに従い次第に遺物が少なくなってくる。特に、Ｄ５区以南、Ｂ３区中央以西では、まったく第Ⅲ層がなくなり、縄文時代と推定される川（ＳＤ 1001）となる。

第１表
集積サヌカイト剥片計測値一覧表
（単位：cm、ｇ）

番号	長さ	幅	厚さ	重量
1	13.7	5.7	2.2	146
2	10.3	5.8	2.2	143
3	11.8	6.3	2.6	183
4	7.3	5.1	1.5	64
5	9.0	8.3	2.5	148
6	11.7	8.0	2.9	185
7	9.4	7.0	2.8	144
8	11.8	7.7	2.7	270
9	9.5	8.5	2.9	241
10	13.2	11.2	2.8	407
平均	10.8	7.4	2.5	193

３．サヌカイト原石の集積

遺構は検出されていないが、Ｄ９区の第Ⅲ層下部においてサヌカイトの大型剥片の集積が検出された（写真１）。その範囲は 16.5 × 21.0cm で、剥片は 10 片である（写真３）。それらのサイズは、長さ 7.3 ～ 13.7cm で平均 10.8cm、幅 5.1 ～ 11.2cm で平均 7.4cm、厚さ 1.5 ～ 2.9cm で平均 2.5cm、重量 64 ～ 407 ｇで平均 193 ｇである（第１表）。大きさにはバラつきが認められるが、厚さは 1.5cm と薄い１点を除き、2.2 ～ 2.9cm でバラつきが少ない。おそらくこれらの運搬に当って石器原材として重視されたのは、この厚さでの質の確認であったと推定される。全体に表皮部分が顕著にみられ、また写真３－１・２・５・９の剥片には、顕著な剥離痕がみられる。

これらは近年大分市横尾貝塚で確認された黒曜石原石のように、カゴに入っていた可能性が高い。その範囲は 40 × 30cm で本遺跡より大型であるが、類似した資料として注目され、本遺跡例などを考える上で示唆的である。

４．土器

集積されたサヌカイト原石以外の出土遺物は、多量の土器片と６点の石器である。土器片はすべて縄文後期に属し､晩期初頭の第２次調査とは異なっている。これらは次のように分類される。

Ⅰ類：磨消縄文系（第２図１～ 20）

これらには後期前葉の中津式（１～５）、同中葉の縁帯文（17・18）、同元住吉山Ⅰ式（19・20）、およびこれらに伴う注口土器（12・13）などがみられる。その他は後期前葉に属す。

Ⅱ類：沈線文系（第２図 21 ～ 45・第３図１～ 30）

これらには後期前葉の中津式（21）、同関東系の堀之内Ⅰ式（22・43 ～ 45）、口縁部文様帯に渦巻文や単線列のみられる縁帯文に先行する一群（24 ～ 36）、同中葉の縁帯文（第３図７～ 16）、同時期の口唇上に沈線や刻み目のみられる一群（17 ～ 27）、元住吉山Ⅰ式（29・30）などがみられる。

Ⅲ類：条線文系（第３図 30・31）

後期前葉の関東系の堀之内Ⅰ式である。

Ⅳ類：縄文系（第３図 32 ～ 38）

後期前葉の粗製土器である。

Ⅴ類：細密条痕文系（第３図 38 ～ 41）

後期中葉の縁帯文の発達した桑飼下式に特徴的な粗製土器である。

Ⅵ類：条痕文系（第４図１～９）

第２図　第１次調査出土土器拓影（1）

粗い条痕文の粗製土器で、後期後葉に下がる可能性もある。

Ⅶ類：無文系（第４図 10 ～ 39）

上記土器群に伴うもので、木葉痕をもつ底部が１点みられる（28）。

以上のように、土器片は後期前・中葉に属すが、前葉より中葉の方が多い。

５．石器

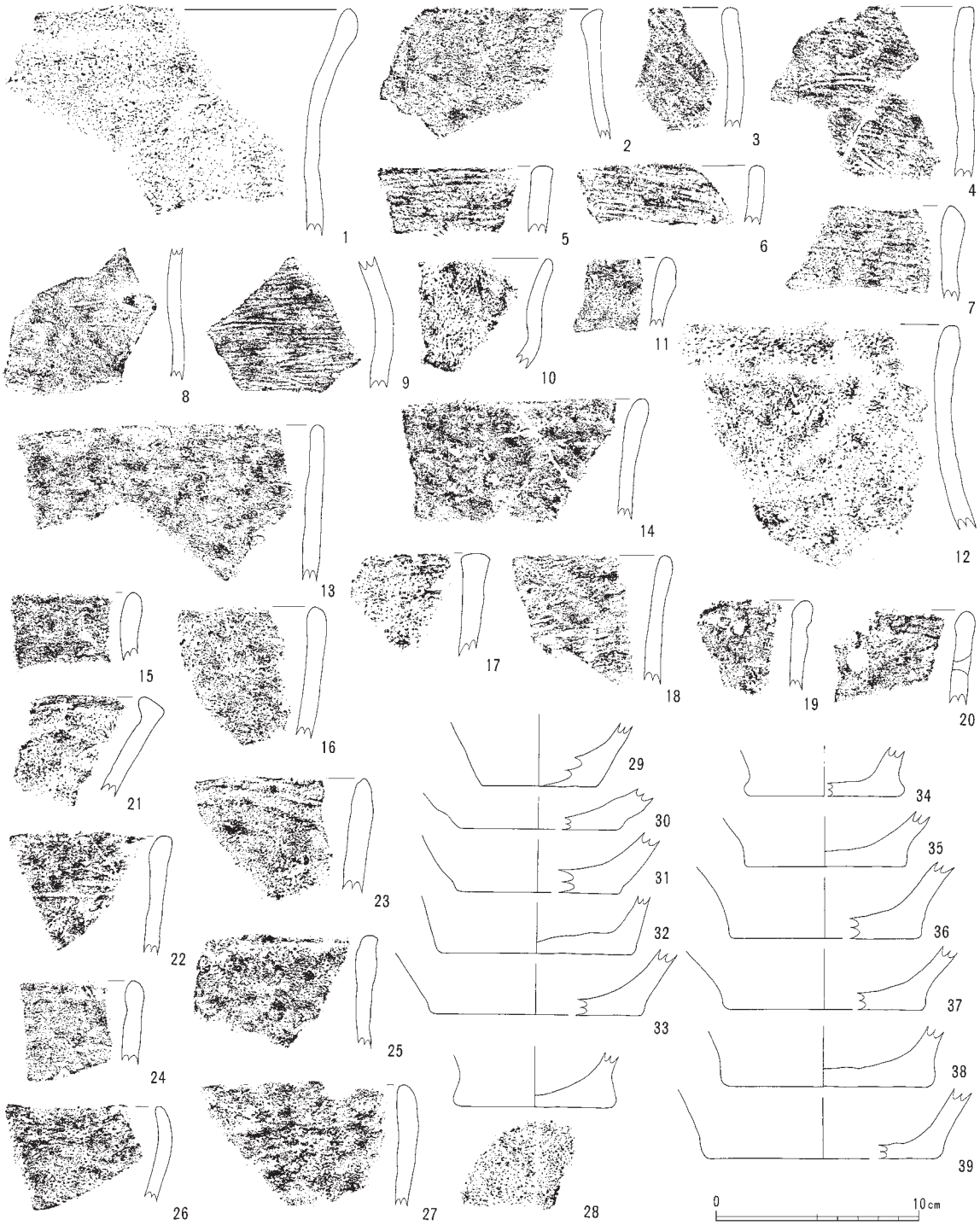
石器は６点出土しており、敲石１点、石鏃３点（内１点は未完成品）、礫石錘１点、スクレイ

第３図　第１次調査出土土器拓影（2）

パー１点である（写真２）。これらの出土地区はＢ２区５点、Ｄ９区１点で、土器片集中区に一致している。次にそれらを個別に記す。

敲石：Ｂ２ｃ区第３層出土。完形。砂岩製。表面にはクルミ割りを示唆するくぼみが上下に２個みられる。裏面には顕著な磨耗痕として、底面と側面との境に稜線が認められる。長さ 11.2cm、幅 9.8cm、厚さ 4.7cm、重さ 760 ｇ（第５図１）。

石鏃１：Ｂ２ｄ区第３層出土。無茎でごく僅かに先端を欠く。サヌカイト製。長さ（1.7）cm、

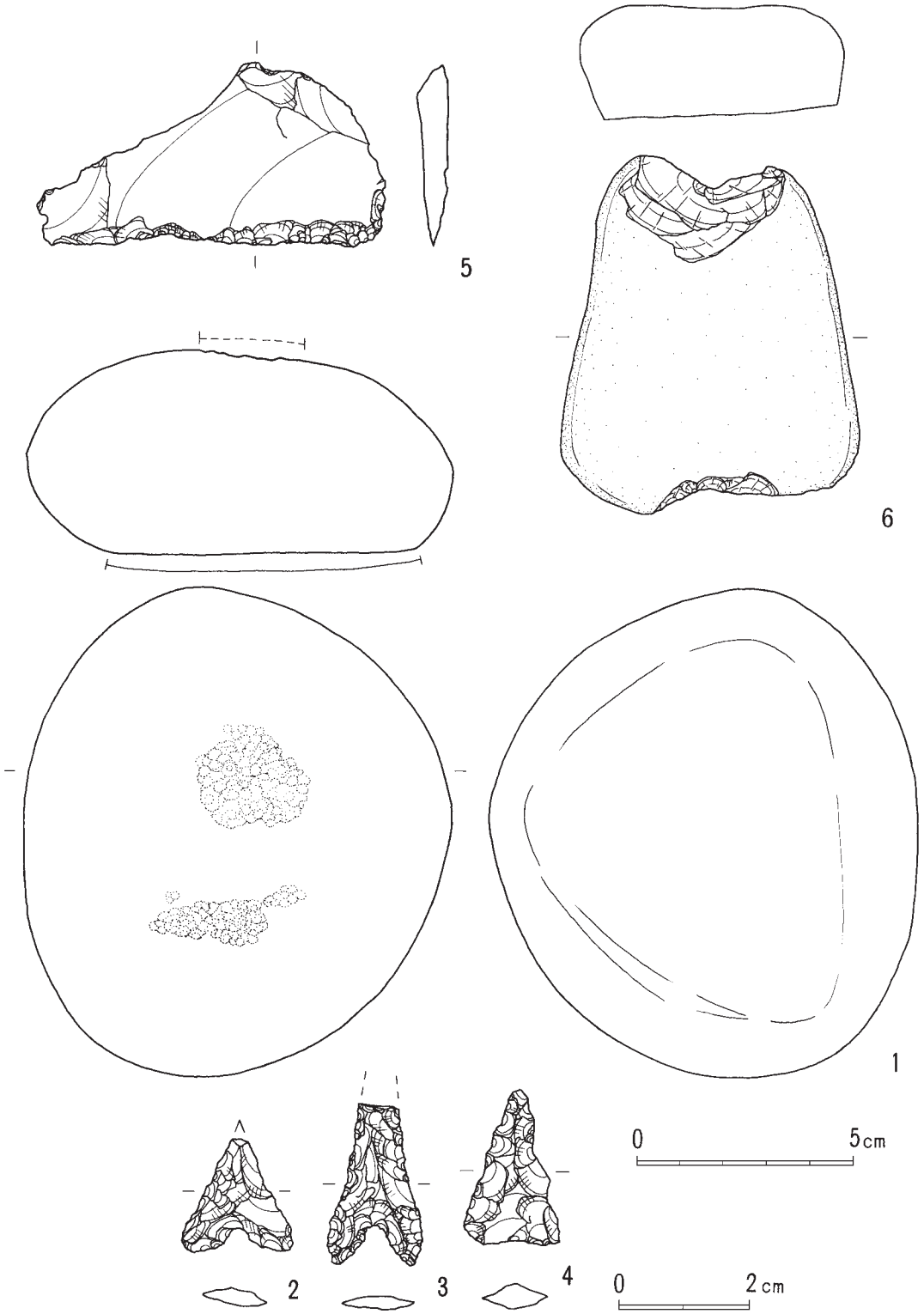


第４図　第１次調査出土土器拓影（3）

幅 1.7cm、厚さ 0.3cm、重さ（0.7） g（同図２）。なお、カッコは不完全数値であることを示す。

石鏃２：Ｂ２ｄ区第３層出土。無茎で先端を欠く。サヌカイト製。長さ（2.4）cm、幅 1.4cm、厚さ 0.2cm、重さ（0.8） g（同図３）。

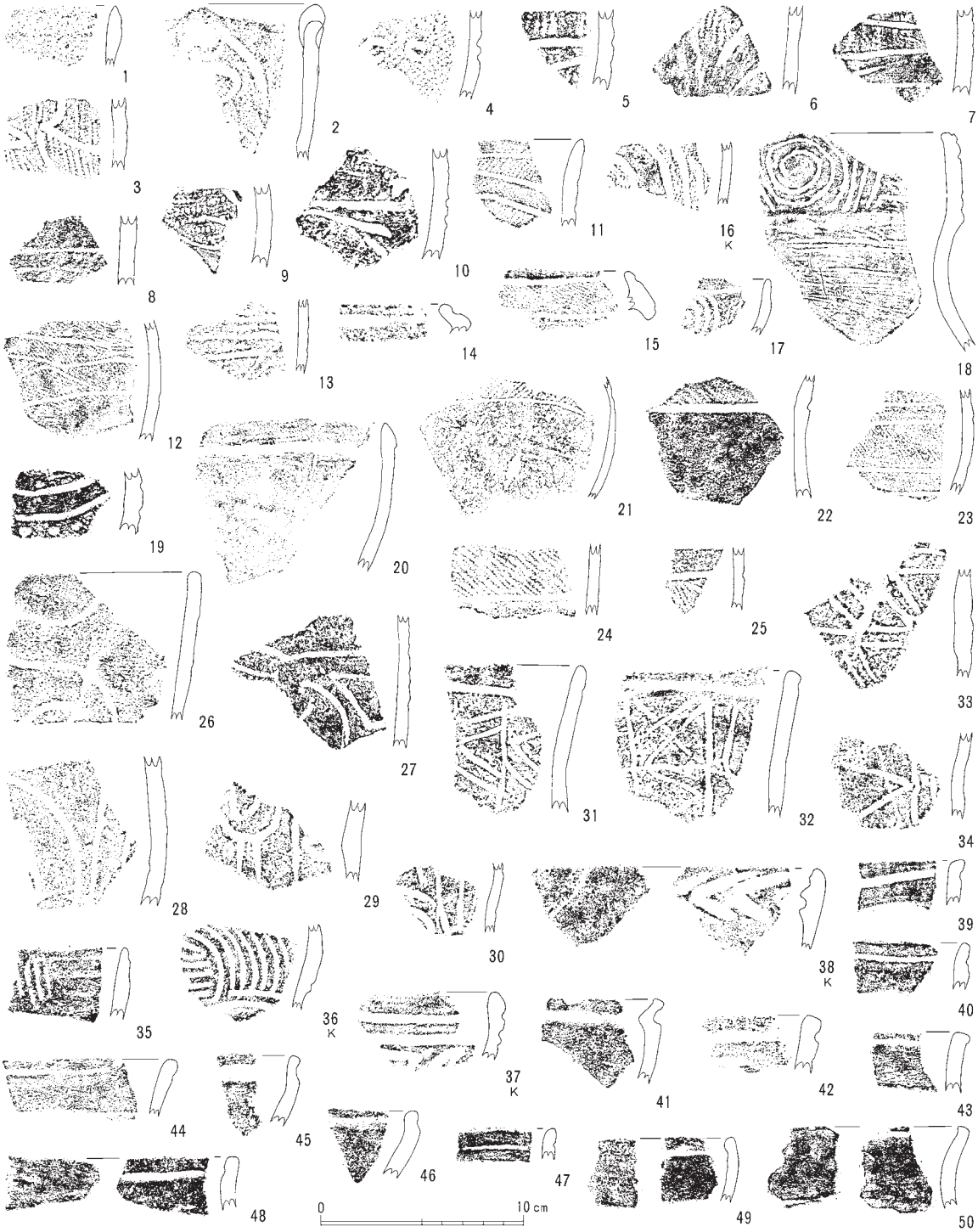
石鏃未完成品：Ｂ２ｂ区第４層出土。無茎で基部に抉りこみがみられない。完形。サヌカイト製。長さ 2.3cm、幅 1.5cm、厚さ 0.4cm、重さ 1.0 g（同図４）。



第５図　第１次調査出土石器実測図

礫石錘：Ｄ９区第４層上面出土。完形。砂岩製。長さ 8.2cm、幅 6.9cm、厚さ 2.6cm、重さ 200 ｇ（同図５）。これは切目石錘と異なり漁網錘ではない。上下の粗い打欠きによって、水中ではロープは切れてしまう。これは編み物用の錘であり、粗い打欠きは上下ともに 3.2cm の広い幅があるが、それはもじり編み（米俵のような編み方）の時のタテ糸を巻きつけておくために必要なものである。

スクレイパー：Ｂ２区揚げ土より採集。完形。サヌカイト製。不定形横長で、下端に細かい打



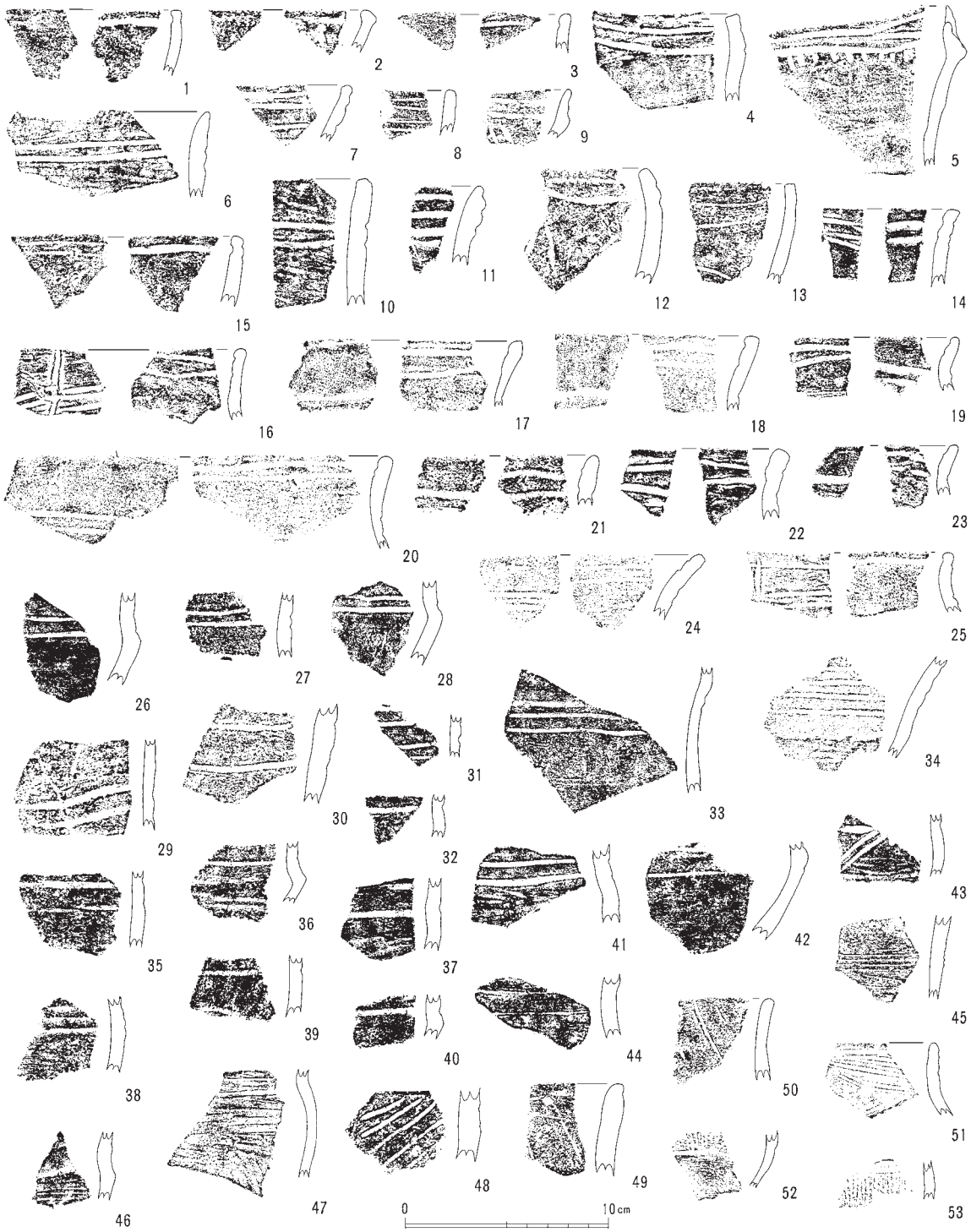
第６図　杉江氏採集土器片拓影（1）　Ｋのみ梶氏採集品

欠きが施されている。長さ 4.2cm、幅 8.0cm、厚さ 0.7cm、重さ 23.2 g（同図６）。

６．採集された土器

発掘調査のきっかけとなった故杉江義郎氏の多量の採集品と、少量の梶晴雄氏の採集品は、次のように分類される。

Ⅰ類：里木Ⅱ式土器（第６図１）



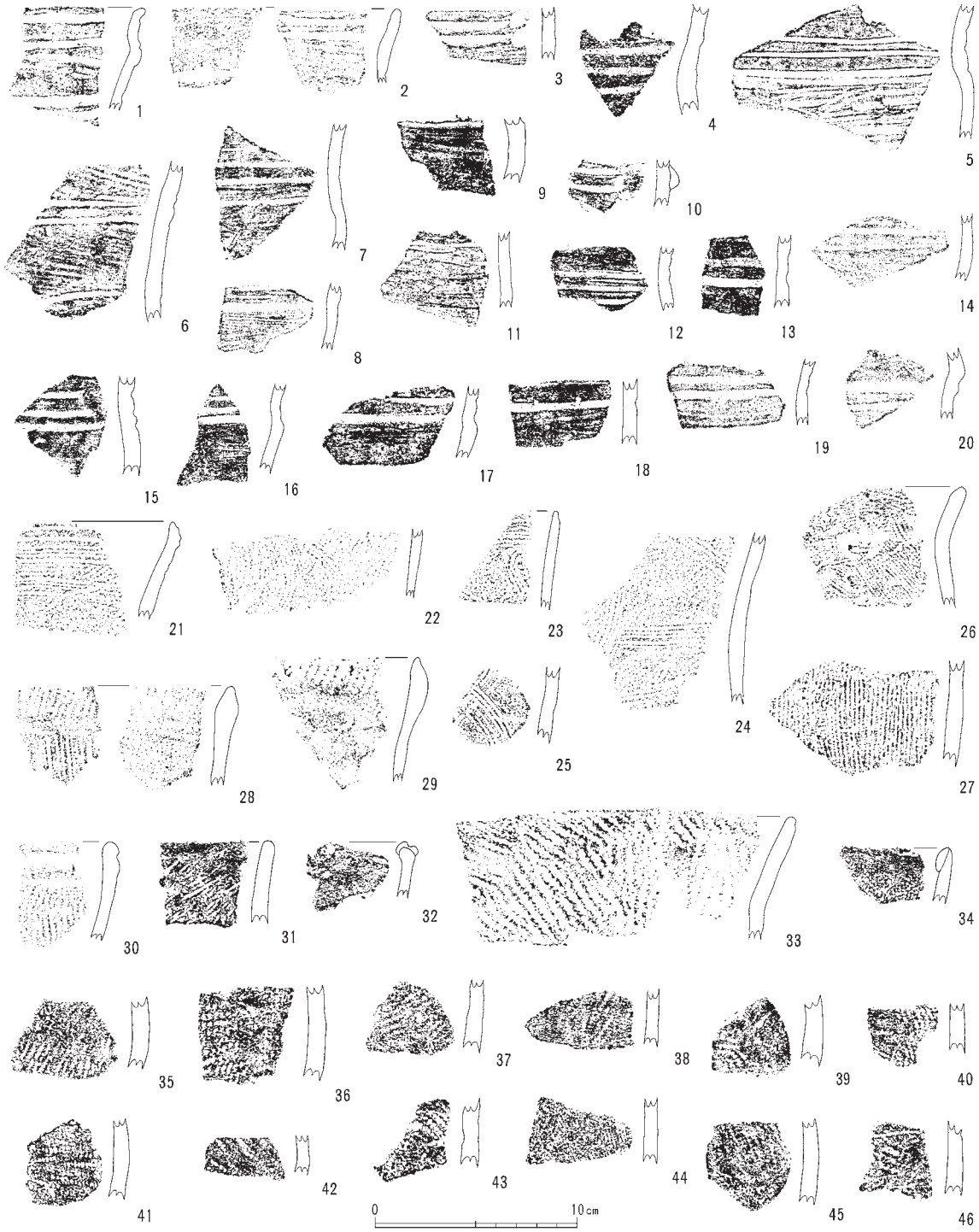
第７図　杉江氏採集土器片拓影（2）

半截竹管文の施文された中期前半の里木Ⅱ式土器。１点のみであるが、本遺跡の上限を示す資料として重要である。

Ⅱ類：磨消縄文系（第６図２～30）

これらには後期前葉の堀之内Ⅰ式（2)、同中葉の縁帯文（17・18)、同後葉の一乗寺Ｋ式（23）などがみられる。

Ⅲ類：沈線文系（第６図 31 ～ 50・第７図）



第８図　杉江氏採集土器片拓影（3）

これらには後期前葉の一群（31 ～ 34）、同中葉の縁帯文（36 ～ 38）、元住吉山Ⅰ式（第７図24）などがみられるが、後者が圧倒的に多い。

Ⅳ類：凹線文系（第８図１～ 20）

後期後葉の宮滝式に特徴的で、条痕文を伴う。ヘナタリ類の側面圧痕も１点みられる（３）。

Ⅴ類：条線文系（第８図 21 ～ 25）

後期前葉の関東系の堀之内Ⅰ式である。

Ⅵ類：縄文系（第８図 28 ～ 46）

後期前葉の粗製土器であるが､縁帯文に先行して口縁部に横走する縄文帯をもつ例もある（28･29）。

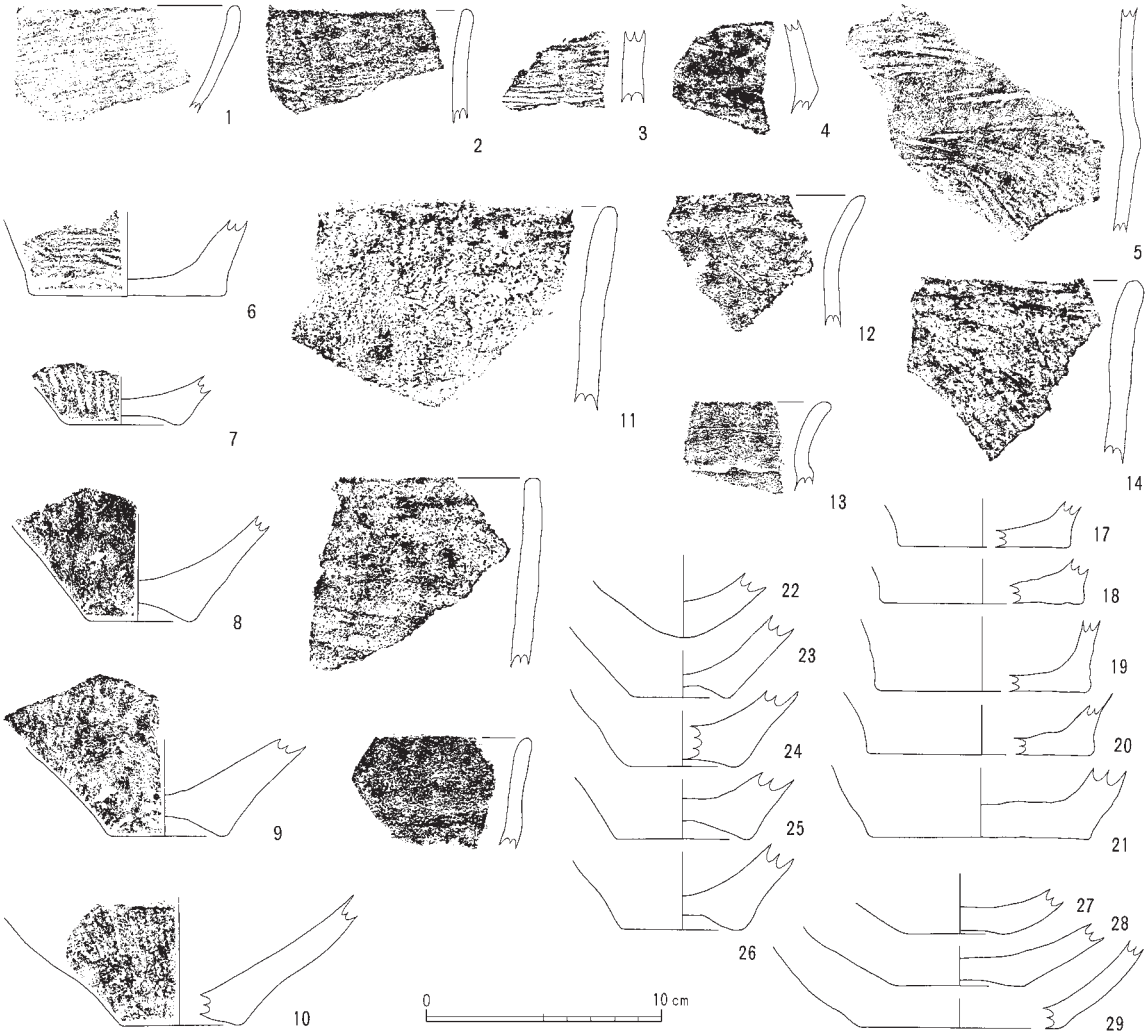
Ⅶ類：細密条痕文系（第８図 26・27）

後期中葉の縁帯文の発達した桑飼下式に特徴的な粗製土器である。

Ⅷ類：条痕文系（第９図１～ 10）

粗い条痕文の粗製土器で、凹底もあり、晩期に下がる可能性もある。

Ⅸ類：無文系（第９図 11 ～ 29、写真４）



第９図　杉江氏採集土器片拓影（4）

上記土器群に伴うもので、丸底や凹底もあり、晩期に下がる可能性もある。また 27 ～ 29 のように立ち上がりの緩いものもあり、浅鉢や注口土器などの深鉢以外の器形の存在を示唆している。

また１点復原された土器がある。高さ 22.0cm、口径 21.0cm、底径 9.6cm（写真４）。

以上のように、土器片は後期前～後葉に属し、中葉でも桑飼下式に続く元住吉山Ⅰ式や後葉の宮滝式などが多い。すなわち発掘資料とは若干のズレがみられることに注目される。また１片ながら中期前葉の里木Ⅱ式もあり、本遺跡の上限を示唆している。

７．採集された石器

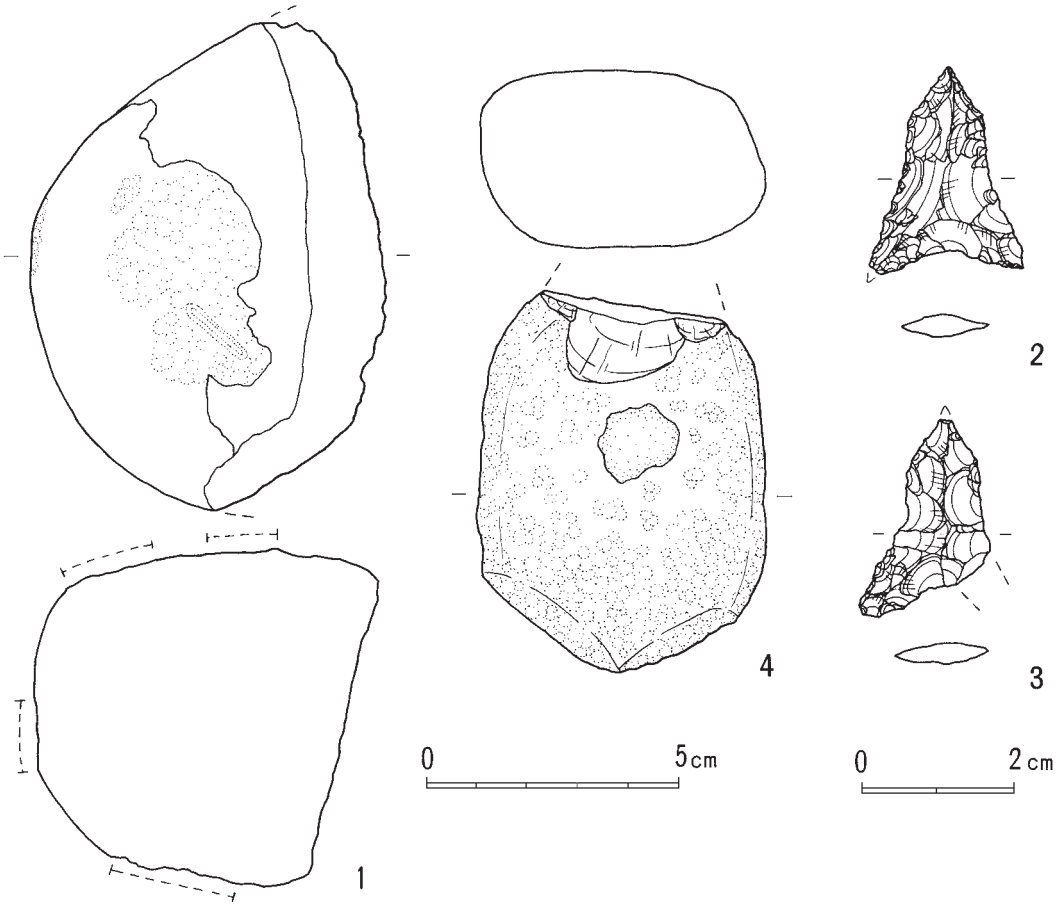
杉江義郎氏によって採集された石器は４点で、磨石１点、敲石１点、石鏃２点である（写真５）。次にそれらを個別に記す。

磨石：半欠品。花崗岩製で、風化が顕著である。長さ（9.6）cm、幅（6.8）cm、厚さ 6.7cm、重さ（574）g（第 10 図１）。

敲石：上端を僅かに欠き、下端は大きく「Ｖ」字形を呈す。細粒斑勵岩製。長さ（7.5）cm、幅 5.7cm、厚さ 3.6cm、重さ（248）g（同図２）。

石鏃１：無茎でごく僅かに脚部先端を欠く。サヌカイト製。長さ 2.8cm、幅（2.0）cm、厚さ 0.3cm、重さ（1.2）g（同図３）。

石鏃２：無茎で一方の脚部を欠く。サヌカイト製。長さ 2.6cm、幅（1.7）cm、厚さ 0.3cm、



第 10 図　杉江氏採集石器実測図

重さ（1.0） g（同図４）。

８．まとめ

最後に本遺跡の特色をまとめると、次の３点が指摘できる。

（1）京都府舞鶴市桑飼下遺跡の発掘調査以来、特に西日本における縄文遺跡の立地条件は東日本と異なり、貯蔵穴などとは別に生活面自体も、低地に立地することが多いという認識はかなり一般的になってきた。本遺跡はこの低地遺跡の好例を追加することになった。

（2）本遺跡は縄文後期を主体とするが、上限は中期後半に遡り、下限は晩期初頭まで下がる。ただし中期後半資料はごく少量で、後期になって発達したとみるべきであるが、この時期は磨消縄文土器に代表されるように、東日本からの影響が強く伝播した時期である。

（3）第１・２次発掘資料、および採集資料の間には若干時期的なズレがみられ、少しずつの居住域の変遷を示唆している。

（4）出土石器には、植物食関係の打製石斧・磨石・敲石、狩猟具の石鏃がみられ、典型的な縄文的組合せである。このうち特に打製石斧は、東日本からの伝播を明示するものである。時期的にも立地的にも、漁網錘としての切目石錘の存在は可能性が高いが出土しなかった。

謝　辞

大変遅くなった報告であるが、発掘調査・資料整理には、次の方々の御協力が多大であった。銘記して深謝の意を表する次第である（五十音順、敬称略）。

発掘調査　植田泰史・上野修一・小沢一弘・河田智子・奈良崎和典・南　博史

資料整理　大橋美緒・奥村幸恵・岡田　賢・吉田泰幸

また、貴重な採集資料を検討させて下さった梶　晴雄氏・故杉江義郎氏、石質の同定をして下さった名古屋大学年代測定総合研究センター長の鈴木和博先生、および種々御教示賜った高橋美久二氏、向日市教育委員会の諸氏に対し、衷心より謝意を表する次第である。

引用文献

高橋美久二「長岡宮跡昭和 51 年度発掘調査概要」（『埋蔵文化財発掘調査概報（1977）』 京都府教育委員会） 1977、１～31 頁

戸原和人・渡辺　誠ほか「長岡京左京第 14 次調査発掘調査報告（『長岡京跡発掘調査報告書（2003）』長岡京跡発掘調査研究所（財）向日市埋蔵文化財センター）2003、１～57 頁

（わたなべ・まこと＝名古屋大学名誉教授・日本考古学協会副会長）

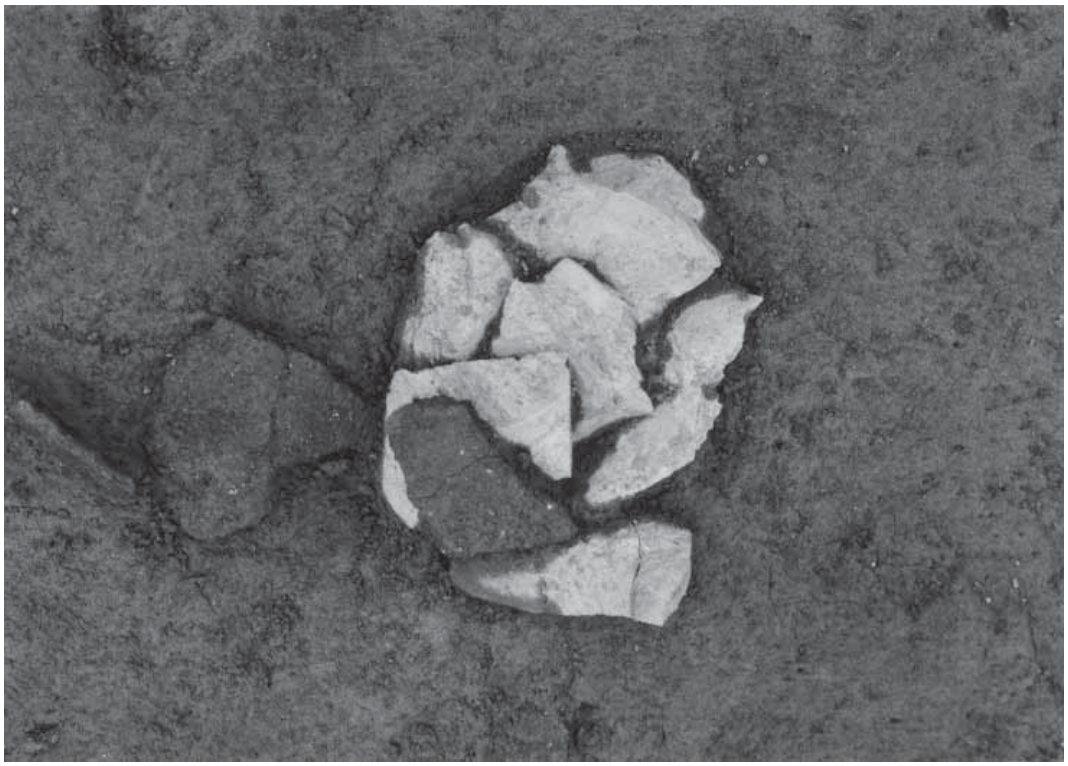


写真１　石田遺跡第１次調査サヌカイト集積出土状態

写真２　同上出土石器

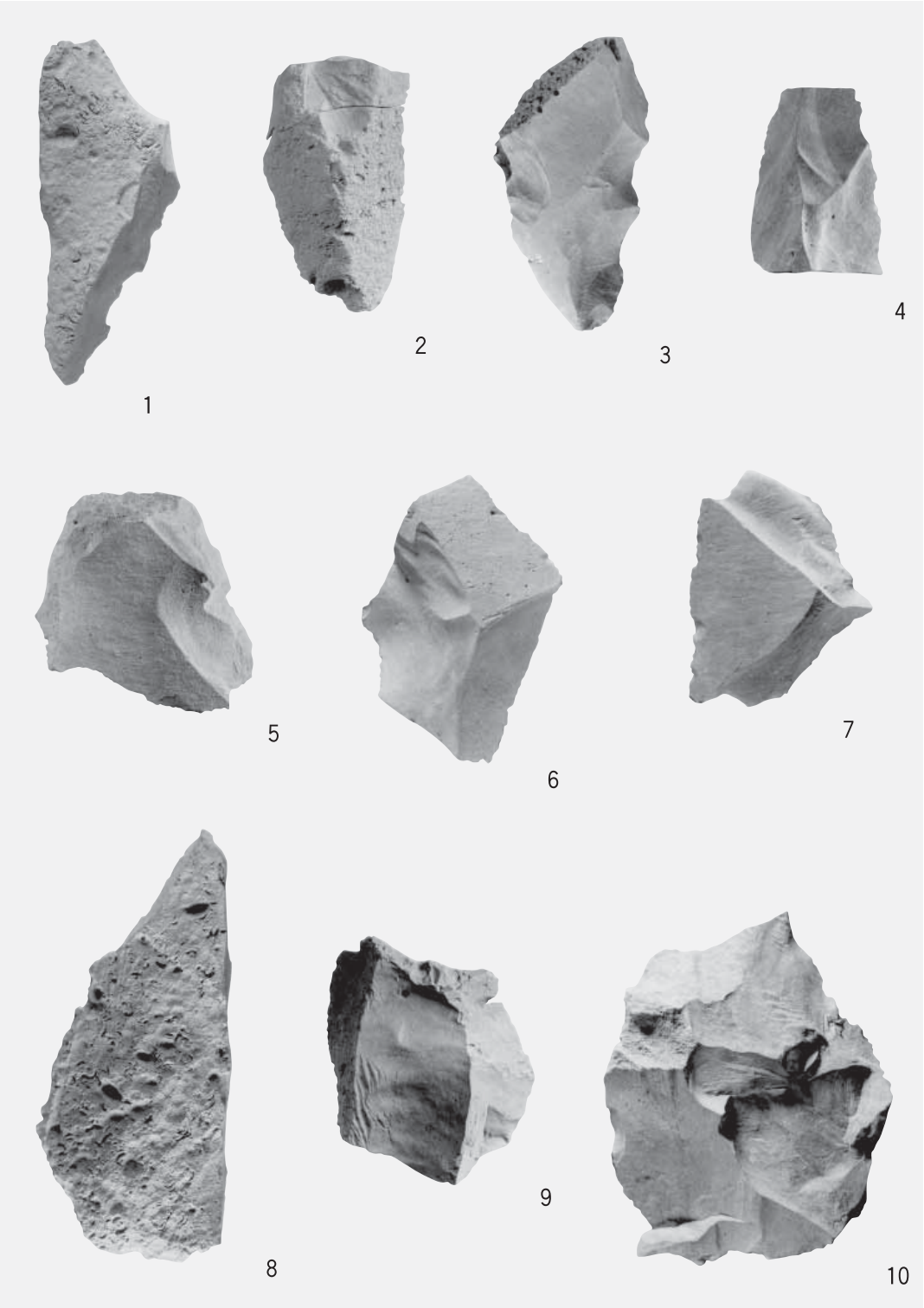


写真３　石田遺跡第１次調査出土集積サヌカイト（S=4/5）

写真４　石田遺跡採集復元土器

写真５　同上石器

1．俵野廃寺第３次（たわらのはいじ）

所 在 地　京丹後市網野町俵野

調査期間　平成20年４月30日～６月６日

調査面積　100㎡

はじめに　俵野廃寺は、丹後地域で所在が確認されている唯一の飛鳥・白鳳期の古代寺院である。調査は、俵野川地域防災対策事業（緊急河川整備）に伴い、京都府交通建設部の依頼を受けて実施した。

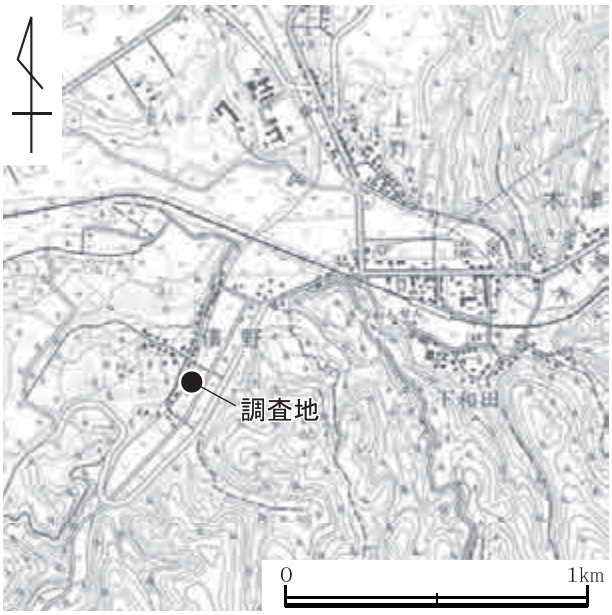
河川の改修工事などによって瓦などが採取され、この地域に寺院跡が存在する可能性が指摘されていたが、今回の事業に係る調査が行われるまでは発掘調査は実施されていなかった。

俵野廃寺の発掘調査は、今回を含めこれまでに３度実施している。平成18年度（第１次）調査では調査対象地内の試掘調査を実施し、多量の瓦堆積を２地点で確認した。

平成19年度（第２次）調査は、前年度の試掘調査の成果を受けて、瓦が集中する部分に調査地区（Ａ・Ｂ地区）を設定し、調査を実施した。調査の結果、Ａ・Ｂ地区において瓦堆積層を広範囲で確認し、２種類の軒丸瓦などを含む多量の瓦が出土した。瓦堆積の中には、軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦などの瓦類のほかに、土器や建築部材と思われる柱材、木製品などが出土した。

また、Ａ地区の南側において、拳大の礫が敷かれた遺構を確認した。さらに、調査区内の東側では、杭や板材を組んだ護岸施設と考えられる遺構を確認した。

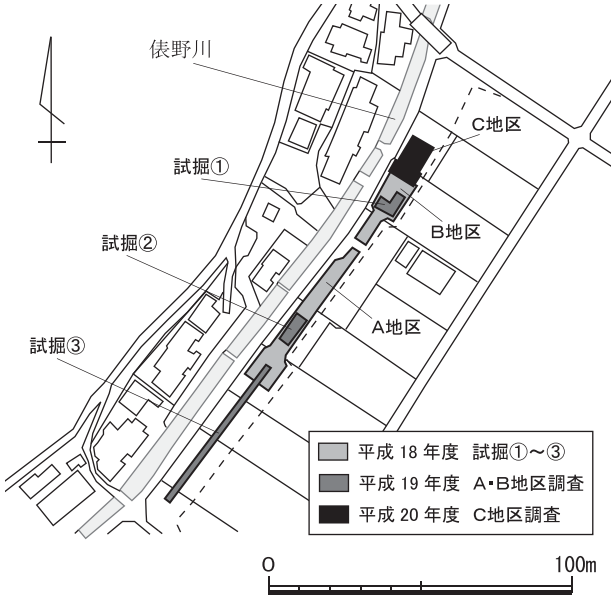
第３次調査となる今回の調査地点は、遺跡範囲の北限に当たる。今回の調査区は、Ｂ地区の北側に隣接した形で設定し、Ｃ地区として調査を実施した。



第１図　調査地位置図（1/25,000 久美浜）

調査概要　Ｃ地区とした調査地区の東側で、昨年度のＢ地区の調査で検出した南北方向にならぶ護岸施設と考えられる杭列の北側に伸びる延長部分を検出した。杭列は、２列に打たれており、一部分ではあるが横板

が残るところがあり、本来はすべてに板材が設置されていたと思われる。この護岸と考えられる施設に使われている杭や板材には枘(ほぞ)穴などが残っているものがある。杭には角杭と丸杭があり、不揃いであることから、再利用の可能性が高いと思われる。調査区中央には、杭列と同方向の溝を検出した。溝内からは、奈良時代前期の遺物が出土した。溝の埋土には、木材片が多く含まれており、水が流れていたことがわかる。また、溝の底部からは、木製の皿が出土した。調査区の西側では、溝の上層で昨年度の瓦堆積に比べると量は少ないものの、瓦や土器などが出土することを確認した。その堆積層中から、昨年度に出土した七葉の花弁を持つ軒丸瓦が１点出土した。昨年度の調査では、調査地の南側であるＡ地区の南側でしかこの軒丸瓦は出土していなかったが、今回初めて北側で出土した。出土遺物から平安時代に廃絶または解体が行われたと考えられ、俵野廃寺で出土した２種類の軒丸瓦が同時期に葺かれていたかどうかは現時点では不明である。



第２図　調査区配置図（1/2,500）

まとめ　調査の結果、調査区の東側には南北方向の溝が流れ、さらに東には俵野川の旧流路があるため、東に遺構が展開する可能性は低い。西側の現俵野川の川底から塔の心礎と思われる礎石が発見されており、この礎石がもとの位置を保っていたとすれば、西側の丘陵との間の狭い範囲に寺院が造られていたと推測されるが、整然とした伽藍配置ではなく、丘陵の平坦部を利用して建物を配置していた可能性も考えられる。伽藍配置や西側の状況については、今後の周辺の調査に期待したい。

（村田和弘）

第３図　Ｃ地区遺構検出状況（南西から）

2．長岡京跡左京第 527 次（7 ANYSK-1 地区）

所 在 地　京都市伏見区淀大下津町

調査期間　平成 20 年 7 月 22 日～ 8 月 25 日

調査面積　500㎡

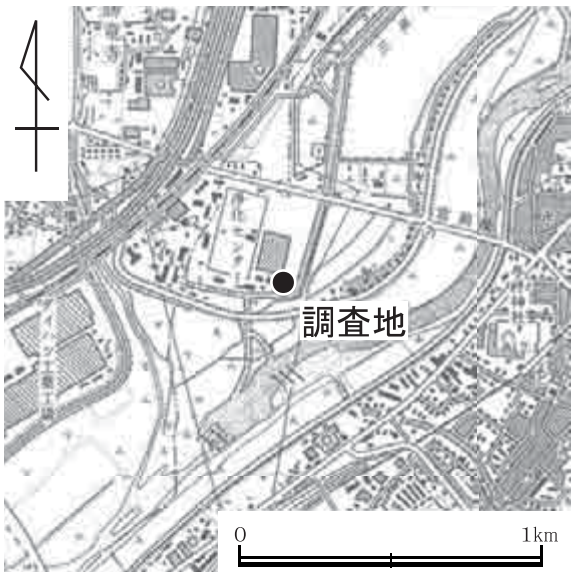
はじめに　長岡京跡左京第 527 次調査は、京都府流域下水道事務所の依頼を受けて行った、桂川右岸流域下水道洛西浄化センター急速ろ過池建設工事に伴う事前調査である。当該地は、長岡京跡の旧条坊では、左京九条一坊十四町に推定されており、東一坊大路の西側溝の検出が予想されていた。また、当該地の北方隣接地には、中世城郭である下津城跡が推定されており、関連する遺構・遺物の検出が予想された。

調査概要　調査地周辺は、現施設である洛西浄化センターを建設する際に３ｍ以上の盛土による造成を行っていることが、予め把握できていた。そのため、調査区の四周に安全な傾斜面を確保する目的で、地表下２ｍ・３ｍ・4.3 ｍに平坦面を設定し、掘削を行った。

その結果､地表下４ｍ（標高 10m）において､昭和 40 年代の旧整地土上面を確認するとともに、地表下 4.3m（標高 9.7m）において旧耕作土上面を検出した。また、旧耕作土下に堆積する灰褐色粘質土層上面では、耕作に伴う溝や牛などの偶蹄類の踏み込み跡を検出した。さらに、地表下５ｍ（標高９ｍ）まで人力掘削による遺構検出を行ったが、灰褐色粘質土が厚く堆積し、部分的に砂層が薄く堆積している状況は確認できたものの、明確な遺構や遺物を検出することはできなかった。なお、灰褐色粘質土層は、ほぼ単一層であり、層内に遺物を包含しないことから自然堆積層であると考えられる。

まとめ　長岡京跡左京第 527 次調査では、地表下 4.3m（標高 9.7m）で近代の耕作面を確認できた。耕作面の正確な標高を把握できたことは、今後、周辺で発掘調査を実施する際の基本的なデータとして重要である。また、当該地より 1.6km 南方に所在する木津川河床遺跡では、標高９ｍにおいて近世の耕作を示す堆積層が確認されており、その上下層では近代から古代にかけての遺構や遺物が確認されている。両地点の堆積環境には相違点も多いが、今回の調査は、桂川・木津川・宇治川周辺における土地利用のあり方を考えるうえで重要な事例となった。

（小池　寛）



第１図　調査地位置図（1/25,000 淀）

3．新庄（しんじょう）遺跡第５次

所 在 地　京都府南丹市室橋

調査期間　平成 20 年５月９日～９月 12 日

調査面積　2,270㎡

はじめに　今回の調査は、府営経営体育成基盤整備事業に先立ち、京都府南丹土地改良事務所の依頼を受けて実施した。新庄遺跡は、亀岡盆地の最北端に位置する集落遺跡で、平成 10 年度から４次におよぶ八木町教育委員会（現南丹市教育委員会）の試掘調査により古墳時代の竪穴式住居跡や奈良時代から中世にかけての遺構・遺物が確認されている。当遺跡の周辺には、池上・野条・室橋・諸畑遺跡などの弥生時代から中世にかけての遺跡が数多く存在し、南丹市域でもとくに遺跡の集中した地域として知られる。

調査概要　ほ場整備の予定地域を対象に４か所（１～４区）で調査を行った。

・**１区**　今回調査対象地の北西に位置する。一辺 4.7 ｍを測る方形竪穴式住居跡１基と、この住居跡の北東側に重複する集石遺構がある。竪穴式住居跡は大きく削平を受けているが、中央に炉をもち、周壁溝をめぐらす。土師器高杯や小形丸底壺の出土から古墳時代中期（５世紀前半）の時期に属する。集石遺構は、大小の石を積み集めたもので、瓦器片等の出土から鎌倉時代と思われるが性格は不明である。このほか、調査地の北側で多数の攪乱土坑が見つかった。これらは最近まで周辺で行われていた瓦製作の土取穴に関係するものである。

・**２区**　少数の柱穴跡と１区と同様な土取穴が検出された。

・**３区**　遺跡内を東西に横断する道路の南側の地区にあたる。主な遺構としては、調査地東側で掘立柱建物跡２棟、半地下式の掘立柱建物跡２棟、中央部で掘立柱建物跡１棟、西側で大溝１条を検出した。半地下式掘立柱建物跡は、平面形が竪穴式住居跡に類似しており、竪穴の一辺がそれぞれ３ｍと 3.5 ｍを測る。いずれも南東の角部には造り付け竈を付設する。建物に伴う柱は竪穴の外周と壁面に接して配置されている。出土遺物から奈良時代に属し、同様な平面形態をもつものが近接する室橋遺跡から検出されている。室橋遺跡では土間（竪穴）をもつ掘立柱建物として考察されており、一般の住居ではなく工房の可能性が考えられている。

第１図　調査地位置図（1/50,000 京都西北部）

中央で検出した掘立柱建物跡は東西２間（4.3 ｍ）×南北２間（５ｍ）の総柱建物で、これを

囲む柵状の柱列が周囲をめぐる。この建物跡は南面に階段を付設するものとみられ、高床式の建物が想定される。中心柱穴の底部からは地鎮に伴うものと思われる中国製青磁椀片と土師器皿が出土しており、建物の時期は、鎌倉時代末頃（13世紀末～14世紀初頭）と考えられる。調査区西端で検出した大溝は幅約３ｍ、深さ約1.1ｍを測る。出土遺物がなく時期は不明である。

第２図　調査地全景（上が東）

・４区　竪穴式住居跡と掘立柱建物跡２棟を検出した。竪穴式住居跡は約４×３ｍの長方形プランをもち北辺中央に竈を付設する。住居に伴う主柱穴は周壁に接して検出した。住居内からは、奈良時代前期（７世紀中～後半）の須恵器杯・蓋が出土した。なお、床面から弥生時代の破損した太形蛤刃石斧が１点出土しており、砥石等に再利用したものと思われる。

第３図　３区半地下式掘立柱建物跡（北から）

まとめ　今回、古墳時代中期から鎌倉時代にかけての遺構が検出され、新庄遺跡の時期や範囲について知見を得た。また、３区で検出した奈良時代の半地下式構造の掘立柱建物跡や、鎌倉時代の掘立柱建物跡のようにやや特異な形態をもつ建物跡が検出された。建物の性格や上部構造の復原については今後の課題であるが、鎌倉末期の掘立柱建物跡については、柱並びの復原案によれば大社造りと類似する平面形を呈しており興味深いところである。当遺跡の南側谷部には、高雄神護寺の僧文覚が築造したと伝えられる文覚池が残り、周辺は平安時代から中世にかけて荘園開発（『吉富新荘』）が行われた土地として知られる。今回の調査は、当地域の歴史的変遷を明らかにしていくひとつの手がかりになるものと思われる。

（辻本和美）

第４図　３区掘立柱建物跡（南から）

第５図　同上建物跡中央柱穴の地鎮遺物

4．戸田（とだ）遺跡

所 在 地　福知山市戸田地先

調査期間　平成 20 年 4 月 23 日～ 10 月 22 日

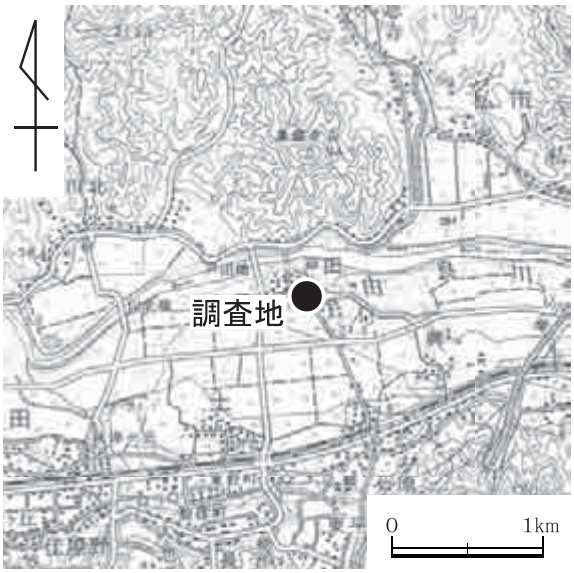
調査面積　2,300㎡

はじめに　戸田遺跡は、福知山盆地の西部に位置し、由良川左岸の自然堤防上に立地する土師器・須恵器などの遺物散布地として知られている。今回の調査は、由良川中流部改修事業の築堤工事に伴うもので、国土交通省近畿地方整備局の依頼を受けて実施した。

由良川中流域には自然堤防上に営まれた遺跡が多数確認されている。今回の調査地付近には、弥生時代から中世にかけての集落跡である観音寺遺跡・興遺跡・土遺跡などがあり、東隣の綾部市域では、味方遺跡・青野遺跡・青野西遺跡などが知られている。

調査概要　この遺跡では、昨年度に試掘調査を行った。今年度は、その結果を受けて、中世の遺構・遺物が残存している地点の本調査を実施した。あわせて、昨年度既存住宅が撤去されていなかった部分も試掘調査を行い、遺構・遺物残存地点の本調査を行った。

今回の調査では、12 世紀後半から 13 世紀にかけての集落跡を確認した。古代以前に遡る遺構は存在していなかった。検出遺構は、柱跡や溝、土坑などである。溝には、集落の区画溝と考えられるものと耕作に伴う溝群と考えられるものがある。区画溝と考えられる溝では、ほぼ正方位に沿ったものと沿わないものがある。出土遺物などから、方位に沿わないものが 12 世紀後半頃、方位に沿うものが 13 世紀頃の遺構と考えられる。耕作に伴うと考えられる溝群は、方位からみて 13 世紀頃の遺構と考えられる。なお、13 世紀頃の居住地と考えられる部分と耕作地と考えられる部分は、現在も使用されている里道をはさんで分かれており、その頃の地割が現在まで踏襲されている可能性も考えられる。



第 1 図　調査地位置図（1/50,000 福知山）

遺物としては、土師器皿・甕、瓦器椀・皿、瓦質鍋、中国製青磁・青白磁などが出土した。そのほか、鎌倉時代から江戸時代頃にかけての遺物が多数出土した。

まとめ　今回の調査では、「戸田」の集落の始まりが 12 世紀後半頃であることが確認できた。これは、この地域の歴史を考える上で重要な成果と言えよう。

戸田遺跡の周辺地域は、古代の雀部（ささいべ）郷に属しており、11 世紀末頃に京都松尾社に寄進され、12 世紀末頃までには松尾社領の荘園雀部庄と

して立荘されていた。松尾大社文書のうち、鎌倉時代から室町時代にかけての雀部庄関係の文書に「富田」「とた」の記載があり、これが今の戸田に比定されている。以上のようなことから、戸田の集落の始まりは松尾社領雀部庄立荘の頃と考えられる。また、今回の調査では、その頃の戸田の集落の一部を確認したと言えよう。

出土遺物では、中国製青磁・白磁・青白磁のほかに、東南アジアもしくは中国南部産の甕とみられる焼締陶器片の出土が注目される。また、国産陶磁器でも中世から近世にかけての各時期の製品が含まれている。戸田の集落は、由良川沿いに営まれている。かつて由良川では、さらに上流の綾部市域まで船が往来していたという。このような多種多様な陶磁器類などからみて、中世から近世にかけての戸田は、由良川の水運を利用した交易活動などによって繁栄した豊かな村であったとみることもできる。

（引原茂治）

第２図　Ｂ地区全景（南東から）

第３図　Ｃ地区溝検出状況（北東から）

第４図　Ａ地区池状遺構（南東から）

遺跡でたどる京都の歴史４

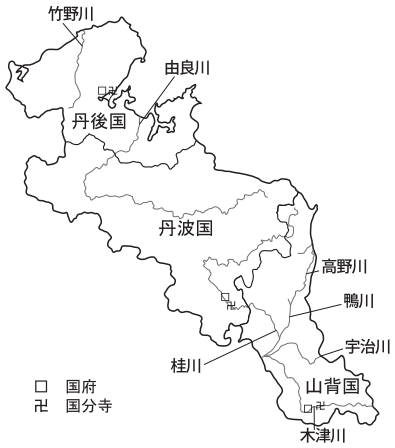
飛鳥・奈良時代の京都

はじめに　６世紀後半から８世紀初頭にかけて奈良県の飛鳥地方を中心に都が置かれました。この時代を飛鳥時代と呼びます。大和王権の統一によって、地方を支配した豪族の時代は終わりをつげた。これまでの身分制度を官職と位階を基本とするものに改め、また、進んだ政治のしくみや文化を学ぶために中国の隋や唐に使節を派遣しました。この頃から文字（漢字）の使用もはじまりますが、実際に使えたのは貴族・役人や僧侶のような限られた人々でした。古墳の築造は一部の有力者に許されたのみでほとんど造られなくなり、それにかわって寺院が建立されました。

710 年に都が藤原京から平城京に移され、784 年に長岡京、さらに 10 年後には平安京に遷都します。飛鳥時代に続く奈良時代は、律令制という中国式の法律によって中央集権的な国家建設が進められた時代です。東大寺の大仏造営を頂点として天平文化の花が開きましたが、きらびやかな貴族の生活と対照的に農民達は度重なる争乱や重い税の負担に苦しみました。

京都府は、律令時代に設定された山背・丹波・丹後の三つの国から成り立っています。ここでは最近の発掘調査を中心に、それぞれの国毎に２つの時代の遺跡をながめて行こうと思います。

・山背国　国名は、政権の中心地であった大和の北側に接することに由来し、奈良時代までは山代･山背の字が使われていましたが、平安時代以降は山城の字が用いられるようになりました。都が平城京に置かれてからは交通の要衝として重用視され、水運の大動脈である木津川（泉川）の河岸には、都や大寺院に物資を運ぶ港が置かれました。740 年に瓶原（みかのはら）（木津川市加茂町）の地に恭仁宮（くにきゅう）が造営され、一時期日本の首都になりますが、わずか５年足らずで難波宮（なにわのみや）（大阪市）に移ってしまいます。短命の都であったため本格的な工事は行われなかったと考えられてきましたが、近年の発掘調査で、他の都にはみられない恭仁宮独自の構造が明らかになってきました。宮跡には、その後山城国分寺が建てられました。古代の役所の跡は、城陽市正道官衙（しょうどうかんが）遺跡（久世郡衙跡）などが有名ですが、同市芝山（しばやま）遺跡でも官衙か駅家（うまや）と思われる大規模な建物跡群がみつかっています。官道に沿う集落跡としては八幡市内里八丁（うちさとはっちょう）遺跡があります。古代の山陰道に沿って飛鳥～奈良時代の建物が並び、出土した多数の銭貨は活発な経済活動を物語ります。また、精華町樋ノ口（ひのくち）遺跡は平城宮に近く奈良時代の離宮跡の可能性があり、同町畑ノ前（はたのまえ）遺跡では豪族の居館跡がみつかっています。山城国内には仏教の伝来とともにいち早く寺院が建てられ、飛鳥～奈良時代には 40 数か所にのぼる多数の寺院が造営されました。立ち並ぶ荘厳な伽藍は道行く人の目を奪ったこ



京都府の旧国位置図

とでしょう。木津川市釜ヶ谷遺跡は当時の水辺の祭りに係わる遺跡で、けがれを祓う墨書人面土器などの祭祀遺物が多数みつかっています。奈良県境の丘陵地には、平城京内で使用する大量の瓦を焼いた瓦窯が多数築かれました。木津川市上人ヶ平遺跡では整然と並ぶ大規模な瓦作りの作業所跡がみつかり国直営の瓦工房の実態が明らかになりました。山背の地は国の政治や経済を支える重要地として平安時代に受け継がれて行きます。

芝山遺跡の官衙建物跡群

・**丹波国**　古くは「たには」と呼ばれ、現在旧５郡のうち２郡が兵庫県に含まれています。山背国から山陰道を通って日本海側の地域にいたる交通上の重要な位置をしめています。国府の所在地については諸説ありますが、はじめは大堰川（桂川）東岸の南丹市八木町屋賀付近にあり、その後、山陰道の移動によって西岸に移ったとされています。亀岡市千代川遺跡は移転後の国府の候補地です。近年、大堰川東岸部では大規模な発掘調査が行われてきましたが、亀岡市池尻遺跡からは役所跡と思われる整然と配置された掘立柱建物跡群がみつかりました。郡衙や駅家説とともに国府跡の可能性もでてきました。近くの池尻廃寺からは白鳳期の藤原宮式軒瓦が出土しており中央との結びつきがうかがえます。

釜ヶ谷遺跡の祭祀遺物

上人ヶ平遺跡の瓦工房跡

奈良時代には、国分寺や国分尼寺（御上人林廃寺）のほか亀岡市内を中心に多くの寺院が建立されました。三日市遺跡では国分寺跡と同じ軒瓦が出土し、国分寺の造営に伴う瓦窯跡であることがわかりました。国分寺跡周辺では、蔵垣内遺跡をはじめ飛鳥～奈良時代にかけての大規模な集落跡がみつかっており、寺や役所を中心に人々が集まる小さな都の景観を呈していました。一方、丹波北部の由良川流域には、郡衙跡とされる綾部市青野南遺跡や郡寺の綾中廃寺がみられ、漢部氏など新しい渡来系氏族が移り住んだものと思われます。山間部には石積みの方形段をもつ飛鳥時代の終末期古墳である綾部市山尾古墳が築かれました。

池尻遺跡の官衙建物跡群

石積みの段をもつ山尾古墳

遠處遺跡の製鉄遺構

・丹後国　丹後国はもともと丹波国の一部でしたが、和銅６（713）年に丹波国から分かれました。日本三景のひとつ天橋立を望む平野部に国府が置かれました。宮津市府中の府立丹後郷土資料館の敷地内には丹後国分寺跡が残っています。古代に遡る寺院跡として京丹後市網野町俵野廃寺があります。布目瓦や塔の心礎と思われる礎石がみつかっていましたが、最近、発掘調査が行われ大量の瓦の堆積や礫敷がみつかりました。出土した軒丸瓦には、都風のものと蓮の花の模様を簡略化した地元産と思われるものがあり、都を離れた土地での寺造りの苦労がうかがえます。仏教の普及とともに火葬の習慣が地方にも広まります。京丹後市大宮町左坂横穴群では丘陵斜面に掘られた小さな横穴内に火葬骨を埋葬していました。

舞鶴市桑飼上遺跡では、奈良時代の大規模な掘立柱建物跡群がみつかっており、由良川の水運に関係する役所跡の可能性があります。丹後は海の幸にめぐまれ、多くの海産物が税として都に送られました。大浦半島にある舞鶴市浦入遺跡では、海水を利用して塩を生産した奈良・平安時代の大規模な製塩炉跡群や大量の製塩土器がみつかっています。ここで作られた塩も都へ送られたのでしょう。京丹後市久美浜町こくばら野遺跡では製塩土器や漁具のおもりが出土しており、海に結びつく村の暮らしがうかがえます。一方、内陸部の京丹後市弥栄町遠處遺跡・黒部遺跡では、砂鉄を利用した奈良時代後半頃の大規模な製鉄遺構がみつかっています。製鉄炉・鍛冶炉・炭焼窯・工房跡からなる古代の製鉄コンビナートで、丹後だけでなく律令国家のもとでの鉄の生産を考えるうえに重要な遺跡です。

（辻本和美）

久世郡衙と北陸道

芝山遺跡の大型掘立柱建物群全景（南から）

芝山遺跡の道路状遺構全景（南東から）

芝山遺跡の道路状遺構全景（南東から）

平城京に都の置かれた時代、山背国を通る古代官道には木津川の右岸と左岸を通る北陸道と山陰道の２つのルートがありました。

城陽市芝山（しばやま）遺跡は、木津川右岸の宇治丘陵の標高 35 ～ 37 ｍの平坦地に位置します。平成 13･14 年度に発掘調査が実施され、官衙か駅家（うまや）が考えられる整然と並んだ大型掘立柱建物群が見つかりました。これらの大型建物跡は方位と建物配置から３時期に分けられます。１期は大型建物群の確立時期、２期は建物群の衰退期、３期は官道の廃絶に伴う官衙機能の消滅時期と考えます。建物群の時期については柱掘形内から明確な時期を示す土器はあまり出土していませんが、建物群を建てるために墳丘を削平された円墳の周溝から出土した土器から７世紀後半～８世紀初頭と思われます。

これに先立つ昭和 60・61 年度の調査では幅 12 ｍの道路状遺構が検出され、また、平成 14 年度の調査でも大型建物群の南東側に位置する調査区で、12 ｍの間隔で平行する南北方向の溝が２本見つかっており、道路側溝の痕跡と考えられています。これらの道路状遺構は大型建物群の東側を通り、古代官道の北陸道や東山道の一部であると推定されています。現在、芝山遺跡の南東側に隣接する丘陵に小字「鷺坂山（さぎさかやま）」の地名が残っていますが、『万葉集』の雑歌には「鷺坂山」を往来した人々によって詠まれた歌が残っています。

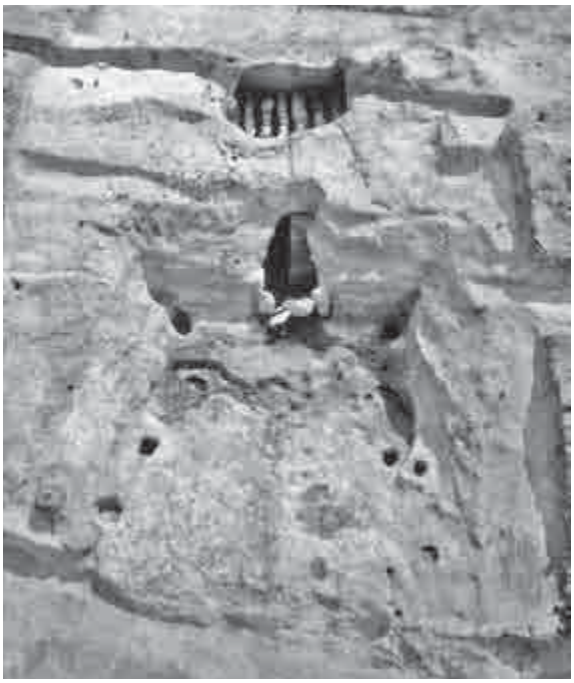
芝山遺跡から北西方向に約１km の丘陵上の標高 40 ～ 50 ｍを測る平坦地に、京都府教育委員会、城陽市教育委員会が調査を行った正道遺跡があります。７世紀後半～９世紀前半の３期に分類される整然と並んだ大型掘立柱建物跡がみつかったこと、建物の規模そして遺跡の立地から、久世郡衙と考えられており、昭和 49 年に史跡指定されました。

これら芝山遺跡、正道遺跡を結ぶ木津川右岸の丘陵部に古代の官道が推定されています。この道路の一部は現在でも奈良街道として受け継がれています。

（柴　暁彦）

奈良山丘陵の瓦窯

瓦焼成のための窖窯（木津川市梅谷４号窯）



瓦焼成のための平窯（木津川市市坂８号窯）

奈良山丘陵の瓦工房想像復元図
（木津川市上人ヶ平遺跡）

持統８（694）年、持統天皇は本格的な都である藤原京へ遷都した。この藤原京では宮の中心部である大極殿・朝堂院と大垣などに瓦が使われ、その使用枚数は 150 万枚とも推定されています。和銅３（710）年に藤原京から遷った平城京では、宮のほか、京内でも一部瓦葺きの建物が並び、平城京・宮での瓦使用枚数は 500 万枚とも 600 万枚ともいわれています。

この平城京・宮への瓦を焼成した瓦工房が、現在の奈良県（奈良市）と京都府（木津川市）の境に横たわる奈良（平城）山丘陵に点在します。現在、この奈良山丘陵では 40 地点ほどの瓦窯跡が確認されています。

平城宮・京の造営に伴う瓦窯は、最初は、５世紀に朝鮮半島から伝わった須恵器焼成窯に似た窖窯で焼成されていました。窖窯は須恵器のように壺や鉢・甕など形や大きさが異なるものには有効ですが、瓦（丸瓦・平瓦・軒瓦や一部鬼瓦を含む）のように規格があり、大きさが揃っているものでは、燃焼効率が悪いようでした。そのために瓦を専ら焼くために改良を加え、燃焼効率を良くした平窯（焼成室に火床をもつ）が造られるようになります。

瓦窯は生瓦を焼成するための窯であり、瓦工房内でのひとつの作業工程ですが、瓦工房には生瓦を成形するために、①粘土の採掘→②粘土こね（瓦にあった砂や混和材を混ぜ）→③瓦の形に成形→④乾燥→⑤窯での焼成→⑥焼成した瓦の確認→⑦供給先への搬送の作業が必要です。奈良山丘陵の中の上人ヶ平遺跡（瓦窯名は市坂瓦窯）では瓦の成形や成形した瓦を乾燥するための作業建物が四棟、近接して建ち並び、体育館程の大きさとなる建物群もみつかっています。

（石井清司）

恭仁宮の四至

今造る久迩（くに）の都は山川のさやけき見ればうべ知らすらし（万葉集巻六 1037）

天平 15（843）年 8 月、大伴家持が恭仁（久迩）宮を詠んだ歌が万葉集に収められています。この時、家持の目の前に広がっていた恭仁宮とは、どんな姿だったのでしょうか。

南西上空から見た宮域

恭仁京は、聖武天皇によって造られた奈良時代の都です。天平 12（740）年から天平 16（744）年にかけてわずか５年あまりの間ですが、都として機能していました。その恭仁京の中心施設が宮城としての恭仁宮で、現在の京都府木津川市加茂町瓶原に所在します。

大極殿の基壇

恭仁宮の範囲（四至）は、東西約 560 m、南北約 750 mの範囲におよび、その四周は、大宮垣と呼ばれる大規模な築地塀で囲まれていました。

また、この大宮垣の東西南北の各辺には、宮城門が存在したものと考えられますが、発掘調査では、東面の南門と考えられる八脚門の遺構が確認されています。

内裏の中心建物

宮内部の施設としては、その中心に大極殿があります。大極殿とは、天皇の即位や元旦等の重要な儀礼が執り行われた宮内中枢の建物です。恭仁宮では、平城宮の第一次大極殿が移建されたものであることが分かっています。さらに大極殿を取り巻く築地回廊についても、平城宮から移建されたものと推定されています。

大極殿の北側には内裏、南側には朝堂院があります。内裏は、天皇の住まいですが、ここでは、東西に２つの区画が並んでいていました。朝堂院は、役人たちが政務を執った施設ですが、建物配置などは今後の課題として残されています。これらの他、宮城内部には、多数の役所群がおかれますが、恭仁宮では、まだその具体像を復元できるに至っていません。

以上のように、かつては幻の都と言われた恭仁宮ですが、発掘調査の進展で具体的に復元できるようになってきました。（森　　正）

写真出典は『恭仁宮跡発掘調査報告Ⅱ』京都府教育委員会 2000

南山城の古代寺院

■ 瓦積基壇の確認された寺院跡

1. 岡本廃寺	2. 大鳳寺跡	3. 広野廃寺
4. 平川廃寺	5. 久世廃寺	6. 正道廃寺
7. 西山廃寺	8. 志水廃寺	9. 美濃山廃寺
10. 興戸廃寺	11. 普賢寺跡	12. 三山木廃寺
13. 下狛廃寺	14. 里廃寺	15. 樋ノ口遺跡
16. 井手寺跡	17. 蟹満寺跡	18. 松尾廃寺
19. 泉橋寺跡	20. 高麗寺跡	21. 燈籠寺廃寺

南山城の主な古代寺院跡

京都府南部の大阪・奈良・三重の３府県に接する地域を南山城と呼びます。南北に流れる木津川（泉川）や山麓の道が交易路として早くから利用され、奈良時代には、平城京と地方を結ぶ交通の要衝として栄えました。飛鳥～奈良時代には数多くの寺院が建立され、仏教文化の華が開きました。現在、古代の寺院跡は 20 数か所確認されており、このうち飛鳥時代創建の寺院としては、太秦（うずまさ）広隆寺と並んで府内最古の寺とされる高麗寺（こまでら）跡や久世（くぜ）廃寺があります。高麗寺跡は、精美な瓦積基壇の金堂（西）と塔（東）をもつ法起寺式伽藍配置の寺で、朝鮮半島からの渡来人によって建てられたと考えられています。近年の発掘調査では、白鳳期（７世紀後半）に伽藍の整備が行われたことが判明し、屋根の両端に鴟尾（しび）をのせた南門跡が見つかっています。かつての久世郡の中心部である城陽市周辺には久世廃寺のほか、正道（しょうどう）廃寺、平川（ひらかわ）廃寺、広野（ひろの）廃寺（宇治市）の４つの寺跡が集中して分布しています。久世廃寺は、法起寺式伽藍で金銅製の釈迦誕生仏が出土しています。平川廃寺は、一辺 17 m を越える七重塔級の大規模な塔基壇をもつことで知られ、白鳳期（7 世紀後半）に建てられ奈良時代に周辺の寺と一緒に大規模な修復が行われたようです。久世廃寺は久世郡の豪族栗隈（くりくま）氏、平川廃寺は渡来系氏族の黄文（きぶみ）氏の氏寺と考えられています。正道廃寺の実態は不明ですが、久世郡衙（正道官衙遺跡）に伴う寺院（郡寺）の可能性があります。久世郡や南山城の寺院の多くは、7 世紀後半頃に当時先端を行く川原寺式の軒丸瓦を採用しています。これについては古代最大の争乱「壬申の乱」で勝利した天武天皇側に味方して功績をあげ、その恩賞として国から氏寺の建立や修復に際して援助を受けたからだとする説があります。奈良時代には平城宮や南都の大寺院と同じ瓦を用いる寺院が多く、南山城の寺院と中央政権との強い結びつきが窺われます。また中心的な建物基壇の周囲に瓦積みを用いる例が多いのも特徴で、渡来系氏族との関連も考えられています。

高麗寺跡の南門跡と鴟尾

（辻本和美）

離宮か寺か

樋ノ口遺跡は木津川市と相楽郡精華町とにまたがる奈良時代の遺跡です。平成３年に当調査研究センターが発掘調査して、掘立柱建物跡や多量の奈良三彩や緑釉陶器、さらには多量の平城宮式の瓦などが出土しました。これらの遺構や遺物の内容から離宮か寺かとの論争が繰り広げられました。当センター理事でもあった足利健亮京都大学教授(肩書は発表当時。以下同じ。)は「山田寺」であると、地名や『興福寺官務牒疏』の記載をもとに断定しました。歴史地理学の方法を駆使した論理展開は完璧で、離宮説を一蹴する勢いでした。これに対して調査担当の伊野はこの遺跡の創建瓦（730 年前後）は平城宮のために用意されたもので、決して寺用ではないとし、山田川が形成した幅の狭い河岸断丘面では、寺や国衙など１町方格の規模が必要な施設は無理で、平城宮の北方にあった松林宮のような不定形な離宮がふさわしいとしました。

他の考えとして上原真人京都大学教授は奈良時代の離宮は在地の瓦を使用した例が多いことを示し、樋ノ口遺跡は異例であることを強調されました。また、滋賀県立大学の高橋美久二助教授は施釉陶器生産を管理する施設ではないかとの見解を、平良泰久氏は稲蜂間氏の居館が移動した案を、奥田裕之氏は藤原式家の別邸かとの見解を出されました。最近では、藤田智子氏が精華町・旧木津町教育委員会による３度の発掘成果をもとに、相楽郡衙であったと結論付けました。

現在、遺跡の中心部は未発掘ですので、論争に終わりはないのです。　　（伊野近富）

遺跡全景（西上空から）

第１次調査地全景（南から）

彩釉陶器類

平城宮式軒丸瓦（6311Aa 型式）

丹波国分寺とその前史

国分寺遠景（東上空から）

三日市遺跡

国分 45 号墳

天平 13（741）年３月、聖武天皇は詔を発し、諸国に国分寺･国分尼寺の建立が開始されます。丹波の場合は、亀岡市千歳町国分に方二町の寺域をもつ国分寺が、約 400 m西方の河原林町河原尻におよそ方一町半の国分尼寺が建立されます。国分寺の伽藍は、東に塔、西に金堂を並べる法起寺と同じ配置です。国分尼寺は、南から南門・金堂・講堂・尼房を配置する東大寺式伽藍配置です。また、奈良時代の山陰道は、両寺間を北上し千歳車塚古墳の西側を通り、現在の亀岡市馬路町池尻に至るとされます。河岸段丘や扇状台地上に並ぶ両寺の様は、周辺の集落からはひときわ大きく見え、山陰道を行き交う人々にとっても、律令国家の威厳を示すものであったと思われます。

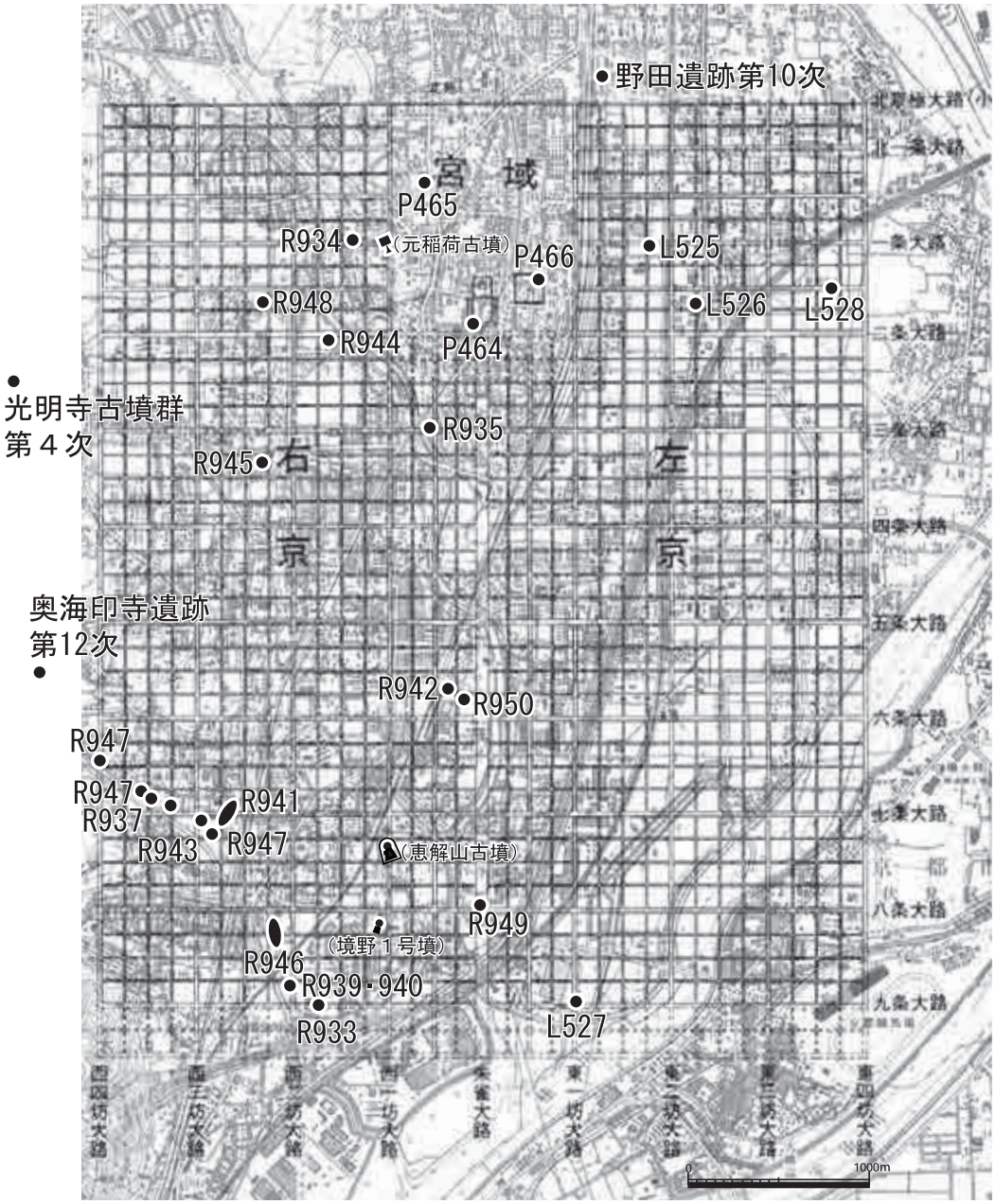
国分寺の北方約 1.4km の所で創建時の瓦が焼かれ（三日市遺跡）、水運でもって国分寺へ運んでいました。馬路町池尻では、整然と並ぶ大型の掘立柱建物群とそれを囲む溝などが見つかり（池尻遺跡）、現在の役所的な公的な施設が存在した場所ではないかとされます。このように奈良時代には、山陰道沿いで国分寺・国分尼寺建立や律令国家の出先機関設立など、大きく開発がなされたと思われます。

国分寺や国分尼寺が建立された付近は、飛鳥時代には、多くの古墳（国分古墳群）が築かれました。中でも国分 45 号墳は、八角形墳に復原することができます。規模は、約 15 mを測ります。両袖式の横穴式石室からは、土器や金属製品など多くの副葬品が出土しました。その中に銀装の太刀がありました。これら出土品から、飛鳥時代中頃に築造されたとと思われます。このような八角形墳は、天皇陵に採用され、単独に築かれるのが普通ですが、国分 45 号墳は、古墳群の 1 基に採用されていました。国分 45 号墳は、墳形や副葬品から大和王権と深く関わる地域首長の墓と考えられ、このような基盤が律令国家に移行し、国分寺建立場所に選定されたと思われます。

（岡﨑研一）

長岡京跡調査だより・103

長岡京跡発掘調査の情報交換及び、資料の統一化を図り、長岡京跡の統一的な研究に寄与することを目的として、毎月１回、長岡京域で発掘調査に携わる機関が集まり長岡京連絡協議会を開催している。平成 20 年４月から９月には、26 件の調査報告があった。そのなかで、長岡京に関



調査地位置図
（向日市文化財事務所・（財）向日市埋蔵文化財センター作成の長岡京条坊復元図に加筆）
調査地はＰが宮域、Ｒが右京域、Ｌが左京域を示し、数字は次数を示す。

する重要な成果が得られたのは、以下のとおりである。

宮跡第 464 次調査では、史跡朝堂院公園内で朝堂院西第四堂跡南半部と楼閣建物跡（翔鸞楼跡）の南端部が調査された。朝堂院西第四堂は、東西 10 間（柱間 13 尺、39m）、南北 4 間（柱間 10 尺、12m）の東西棟礎石建物であるが、その南庇柱に相当する根石 4 基、基壇南側の地覆石据付跡、同据付裏込土、同抜き取り跡、階段跡 2 か所、石敷が確認された。基壇の規模は、南北 17.4m（58 尺）、東西 45m（150 尺）と確定し、南面階段は、南西隅柱から東に 3 間目と 8 間目の 2 か所に推定できた。以前の調査で北面階段は、西から 6 間目にあったことが確定しており、南と北で階段の位置が異なることとなった。朝堂院南門と複廊でつながれた楼閣跡（翔鸞楼跡）の南端部分の調査では、近世以降の撹乱によって、楼閣建物に関わる根石や基壇は確認できなかったが、建物南半部における丁寧な整地作業の状況が明らかになった。

左京第 525 次調査では、一条大路南側溝と東二坊坊間小路東西両側溝が検出され、一条大路と東二坊坊間小路の交差点では、大路の側溝が優先され小路の路面を横切ることが確認された。今回見つかった一条大路の南側溝は、幅約 3.2m、深さ約 0.6m の規模で、この側溝を渡るための飛び石か橋の基礎石と考えられる 0.5m 大の巨石が 3 個、南北に並んで見つかっている。なお、一条大路南側溝からは、長岡京期の土器類が多数出土している。とくに、道路交差点内に多く獣骨も伴うことから、何らかの祭祀が行われ、終了後、廃棄されたものと考えられる。

野田遺跡第 10 次調査地は、長岡京跡の北限に推定されている北京極大路の北側へ約 40m の地点である。近年、長岡京跡の北側で長岡京時代の遺構が確認される事例が増えており、1995 年、長岡宮跡の中軸線上で行われた宮跡第 316 次調査では、北京極大路から 1 町分北側まで条坊街区が確認されている。今回の調査地でも、東二坊坊間西小路の東西両側溝の延長が検出され、左京域においても北側に条坊道路が延びていく状況が確認され、条坊街区がさらに北方に拡がっている可能性が高くなった。

そのほか、**左京第 526 次**調査では、東三坊坊間西小路東側溝と二条三坊六町西辺の区画に関わる溝の延長部が検出され、**右京第 941 次**調査では昨年度の右京第 927 次調査で検出された瓦類が多量に入った 2 条の平行する東西溝の延長が見つかった。また、**右京第 944 次**調査では、二条大路の南側溝、柱根が残る掘立柱建物跡など、右京三条二坊九町に関わる遺構群が検出された。

なお、長岡京期以外では、右京第 933 次調査で古墳時代後期から飛鳥時代の竪穴住居 10 基、掘立柱建物跡 4 棟などが検出され、竪穴住居から掘立柱建物へ移行した状況が確認された（松田遺跡）。また、右京第 942 次調査では、神足館跡（近世勝竜寺城跡）の遺構群と弥生時代中期の円形竪穴建物群が検出され（神足遺跡）、右京第 943 次調査では、縄文時代後期の火葬墓 2 基が確認されるなど（伊賀寺遺跡）の大きな成果があった。

（田中　彰）

普及啓発事業

当調査研究センターは、京都府内で国や府等が行う公共事業によって消滅する埋蔵文化財の記録を後世に残すために発掘調査を実施しており、その成果を広く府民の皆様に報告し、地域の歴史を理解していただくために、発掘調査現地説明会・埋蔵文化財セミナー・小さな展覧会・出前授業等の普及啓発活動を行っています。

埋蔵文化財セミナー

第110回埋蔵文化財セミナーを平成20年6月28日（日）に亀岡市民ホールで開催しました。今回のテーマは、「保津川東岸の古代亀岡」と題して実施しました。平成9年度から平成19年度まで京都府教育委員会・亀岡市教育委員会・当調査研究センターが実施した国営ほ場整備事業に係る大規模な発掘調査が終了したことから、その多大な成果を通史的にとらえることを目的に、各調査機関の担当者が弥生時代・古墳時代・歴史時代と時代を分担して報告しました。当日の参加者は93名を数え、現存する丹波国分寺や全長80ｍを越える千歳車塚古墳の他に、保津川東岸部で田園地帯により保護されていた数々の遺跡の報告を満喫していただき、盛況裏に終えることができました。

第111回埋蔵文化財セミナーを、平成20年8月9日（土）に向日市民会館で開催しました。このセミナーは、同時開催している「小さな展覧会」・「絵でみる考古学－早川和子原画展－」に関連した講演会として実施しました。上原真人京都大学大学院教授（当センター理事）には「近年の発掘調査成果から」と題して、史跡名勝笠置山の調査成果や大安寺瓦屋についての講演をいただきました。早川和子氏との対談「イラストが語る考古学」では、早川氏から考古イラストが完成するまでの苦労話を、エピソードを交えて楽しく紹介していただきました。また、担当者がパワーポイントを用いて展覧会の見どころを紹介し、違った視点から遺物やイラストを鑑賞していただくことになりました。当日は138名の参加者を得て盛況裏に終えることができました。

第110回埋蔵文化財セミナー

第111回埋蔵文化財セミナー

展覧会

「第 24 回小さな展覧会」・「絵でみる考古学―早川和子原画展－」は、向日市文化資料館の常設展示室、ラウンジ、2 階研修室で開催しました。開催期間は、平成 20 年 7 月 19 日から 8 月 24 日まで開館日延べ 30 日間、2,894 名の方々に観覧していただきました。

今回の展覧会では、開期及び準備・撤収を含め約 2 か月に及ぶこと、かつ、向日市文化資料館と協調してよりよい展示を行う必要があることから、調査１・２課合同で委員 10 名による展覧会実行委員会を組織し、２課調査員の展示応援も得て職員一丸となって実施しました。

・「第 24 回小さな展覧会」

第 24 回小さな展覧会

例年、前年度の調査成果速報展として 8 月後半期の約 2 週間実施している小さな展覧会も 24 回目を迎えました。今回は、平成 19 年度に京都府内で当センター及び府市町が調査を実施し、注目を集めた 18 遺跡のパネルと遺物、5 遺跡のパネルを展示しました。

史跡名勝笠置山の剥ぎ取り土層断面の展示では、元弘の乱（1331 年）で焼失した堂宇の焼土や高麗青磁に小学生は目を輝かせていました。また、調査を終了した亀岡市の国営ほ場整備関係の池尻遺跡や時塚遺跡など 7 遺跡の主だった遺物をできるだけ露出展示し、調査員が説明を加えながら古代の土器に触れていただくよう努めました。この展示にも早川氏のイラスト 5 点を要所に展示したため、「いつも以上にわかりやすかった」と好評を得ました。普及啓発コーナーでは、セミナーや出前授業等の活動状況をパネル等で紹介しました。特に、亀岡高等学校の学生達が制作した完成度の高い篠窯跡の模型は、入館者の目を引きつけました。展示室前に設けた、ぬりえ・縄文土器の施文体験コーナーは、幼児や小学生だけでなく保護者や大学生にも人気があり、何回となく入館していただきました。

・「絵でみる考古学―早川和子原画展－」

この原画展は、平成 19 年度から 20 年度にかけて、大阪府立近つ飛鳥博物館を皮切りに綾部

市資料館、明石市立文化博物館、西都原考古博物館、奈良文化財研究所飛鳥資料館、高槻市立しろあと歴史館、横浜市歴史博物館、島根県立古代出雲歴史博物館、向日市文化資料館、九州国立博物館、多賀城市埋蔵文化財調査センターの 11 館を巡回展示しています。

早川和子さんは、当センターの木津事務所で臨時職員として作業に従事していただいた経緯もあり、当時からイラストも多く描いていただきました。その縁から当センターでも向日市文化資料館と共催で開催する運びとなり、都城関係を中心とした約 70 枚のイラストを展示しました。

展示は、常設展示室「長岡京の歴史と文化」では文化資料館が担当し、既存の展示をできるだけ動かさずに、早川氏のイラスト約 30 点を巧妙に配置し、小さい子供にも分り易い展示となりました。また今回、長岡京のイラスト 4 点（丘の上に造られた都・天皇、大極殿で朝賀を受ける・百官はじめて朝座に着く・完成まぢかの築地）も新たに作成されています。

ラウンジからはセンターが中心となり展示しました。「イラストを単に並べるだけでなく、遺構パネルや遺物とともに展示してほしい」との早川氏の意向もあり、できるだけ多くのパネルや遺物を展示しました。また縄文時代の体験（体感）コーナーでは、衣・食・住をイラストや模型で復元し、クルミを石器で割る体験も好評でした。古墳の模型、京都コーナーを設けわかりやすく展示しました。

期間中、向日市文化資料館主催で、夏休み子供歴史教室を 8 月 6・7 日約 30 名の小・中学生が「えがきましょう古代の形」というテーマで早川和子氏指導のもと歴史絵本を作成しました。第 111 回埋蔵文化財セミナーを、平成 20

絵でみる考古学－早川和子原画展－

絵でみる考古学－早川和子原画展－

年８月９日に向日市民会館で開催した時には、展覧会場に来られた多くの見学者の似顔絵を早川氏に書いていただきました。

出前授業

当調査研究センターでは、地域の歴史を子供たちに知っていただこうと出前授業や発掘調査体験を実施しています。６月には、南丹市八木町新庄小学校５・６年生に、学校に隣接して調査を実施していた新庄遺跡の発掘体験とスライドを用いた遺跡説明、石器作りなどを行いました。その様子は、ＮＨＫでも放映され、たいへん好評を得ました。７月には、笠置町立笠置小学校６年生を対象に、発掘調査でわかった笠置山の歴史について学んでもらいました。

出前授業

今年度は、全国的にも３例目となる万葉歌木簡が出土した馬場南遺跡、縄文時代後期の火葬人骨を検出した長岡京市伊賀寺遺跡など、新聞紙上でも話題となる調査が相次いでいます。今後も現地説明会や埋蔵文化財セミナー等で調査成果を発表してまいりますので、その折には会場に立ち寄っていただき、古代の歴史を満喫していただければ幸いです。

センターの動向

（平成 20 年 6 月～ 10 月）

月	日	事　　項
6	5	南丹市新庄小学校 新庄遺跡現地見学・発掘体験
	6	俵野廃寺（4.30 ～）発掘調査終了
	12	南丹市新庄小学校体験学習 高野陽子調査員講師派遣
	12 ～ 13	全国埋蔵文化財法人連絡協議会総会開催（於：京都市） 上田正昭理事長、中西和之常務理事・事務局長出席（当センター開催当番法人）
	14 ～ 15	史跡王山古墳群環境整備工事完成記念研究フォーラム（於：福井県鯖江市）肥後弘幸調査 1・2 課長講師派遣
	16	職員研修「財団法人調査組織の課題と今後」講師；小池寛調査第 1 係長
	17	監事監査（事前補助監査）（於：当センター） 長岡京跡（長岡京市、第二外環）発掘調査開始
	19	京都府庁開庁記念日記念式典（於：京都市）中西和之常務理事・事務局長出席
	20	監事監査（監査・講評） 全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿ブロック OA 委員会（於：枚方市）小山雅人総括調査員、石崎善久調査員出席
	24	上原真人理事馬場南遺跡（木津川市）現地視察
	25	長岡京連絡協議会（於：当センター）
	26	第 83 回役員会・理事会（於：京都市）上田正昭理事長、中尾芳治副理事長、中西和之常務理事･事務局長、石野博信、井上満郎、都出比呂志、中谷雅治、上原真人、山内 一、高熊秀臣、小池 久各理事、森永重治監事出席
	27	摂津市いきいきカレッジふれあいの里講座（於：摂津市）黒坪一樹専門調査員講師派遣
	28	第 110 回埋蔵文化財セミナー（於：亀岡市民ホール 参加者 93 名）
7	1	久保三左男木津川市教育長 馬場南遺跡現地視察 安全パトロール実施 長岡京跡（長岡京市）
	7	河井規子木津川市長 馬場南遺跡現地視察 金沢城調査研究委員会（於：石川県）森島康雄主任調査員派遣
	8	笠置小学校 6 年生出前授業（参加者 17 名）小池寛調査第 1 係長派遣
	10	上田正昭理事長 馬場南遺跡出土木簡指導
	14	長岡京市教育長 伊賀寺遺跡（長岡京市）現地視察
	16	坂井秀弥文化庁主任調査官 馬場南遺跡現地視察
	18	全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿ブロック主担者会議（於:枚方市）肥後弘幸調査第 1・2 課長、小池寛調査第 1 係長出席 職員研修「デジタル図面を活用した報告書作り」講師；森島康雄主任調査員
	19	第 24 回小さな展覧会・絵でみる考古学展開催（於：向日市文化資料館）
	22	石野博信、都出比呂志理事 伊賀寺遺跡・馬場南遺跡現地視察 長岡京跡・下津城跡（京都市）発掘調査開始
	23	人権大学講座（世界人権問題研究センター）小山雅人総括調査員受講
	24	新公益法人に関する説明会（於：京都市）安田正人事務局次長・杉江昌乃総務係長出席 「京丹後史博士」育成講座（於：京丹後市）村田和弘調査員講師派遣
	28	辻本清隆木津川市参与 馬場南遺跡現地視察
	30	長岡京連絡協議会（於：当センター）
8	1	市町村記念物保護行政担当者会議（於：京都府庁）水谷壽克調査第 1 課主幹、森島康雄主任調査員参加
	7	高橋誠一、中谷雅治理事 馬場南遺跡現地視察
	9	第 111 回埋蔵文化財セミナー（於：向日市民会館 参加者 138 名）
	11	中尾芳治副理事長、井上満郎理事 馬場南遺跡・伊賀寺遺跡現地視察
	12	小池 久教育庁指導部理事文化財保護課長事務取扱 馬場南遺跡現地視察
	19	理事協議会（於:当センター）上田正昭理事長、中尾芳治副理事長、中西和之常務理事・事務局長、石野博信、都出比呂志、中谷雅治、上原真人各理事出席

	20	センター本部臨時職員人権研修（於：当センター）
	21	教育庁役付職員人権問題研修Ⅰ（於：京都市）杉江昌乃総務係長、小池寛調査第 1 係長、岩松保主任調査員受講
	23	京田辺市郷土史講座 柴暁彦主査調査員講師派遣
	24	第 24 回小さな展覧会・絵でみる考古学展閉展（7/19 ～ 参加者 2,884 名）
	25	教育庁役付職員人権問題研修Ⅰ（於：京都市）安田正人事務局次長受講 長岡京跡・下津城跡（7.22 ～）発掘調査終了
	27	長岡京連絡協議会（於：当センター） 栄原永遠男大阪市立大学教授馬場南遺跡現地指導
	28	長岡京跡・伊賀寺遺跡（府道 5.7 ～）発掘調査終了
	30	丹後郷土資料館文化財講座（於：宮津市）引原茂治主任調査員講師派遣 新庄遺跡現地説明会（参加者 27 名）
9	3	教育庁役付職員人権問題研修Ⅰ（於：京都市）肥後弘幸調査第 1・2 課長、水谷壽克調査第 1 課主幹、石井清司調査第 2 課課長補佐、森正調査第 2 係長受講
	6 ～ 7	埋蔵文化財研究集会（於：福岡県）高野陽子調査員出席
	9	高熊秀臣教育庁指導部長・中西和之常務理事・事務局長馬場南遺跡現地視察
	12	新庄遺跡（5.9 ～）発掘調査終了
	16	職員研修「馬場南検討会」講師；松尾史子調査員
	18	高嶋学京都府政策企画部長馬場南現地視察
	20	長岡京跡・伊賀寺遺跡・友岡遺跡現地説明会（参加者 279 名）
	23	戸田遺跡（福知山市）現地説明会（参加者 131 名） 大内村歴史フォーラム（於：福知山市）伊野近富次席総括調査員講師派遣
	24	長岡京連絡協議会（於：当センター） 長岡京跡・井ノ内遺跡（長岡京市）発掘調査開始 長岡京跡（長岡京市西の京）発掘調査開始 人権大学講座（於：京都市）石井清司調査第 2 課課長補佐受講
	26	井上正嗣宮津市長来所、難波野遺跡（宮津市）調査成果を報告 乙訓地域「応急手当講習」（於：向日市）竹原一彦、岩松保主任調査員、今村正寿総務課主任受講
10	6	魚田遺跡（京田辺市）発掘調査開始
	7	人権研修会（京都人権啓発行政連絡協議会）肥後弘幸調査第 1・2 課長受講
	8	人権大学講座（世界人権問題研究センター）水谷壽克調査第 1 課主幹受講
	9	上田正昭理事長 馬場南遺跡調査指導
	9 ～ 10	全国埋蔵文化財法人連絡協議会研修会（於：神奈川県）杉江昌乃総務係長出席、今村正寿総務課主任、田中彰調査 1 課主任調査員出席
	10	高橋照彦大阪大学大学院准教授馬場南遺跡出土遺物指導
	11	南丹高等学校開放講座（於：亀岡市）小池寛調査第 1 係長講師派遣
	16	木津城山遺跡現地説明会（参加者 69 名）
	17	毛利正守武庫川女子大学教授馬場南遺跡出土木簡指導
	18	第 35 回歴史文化教室（乙訓の文化遺産を守る会）岩松保主任調査員講師派遣
	21	第二外環調子地区関係者説明会（参加者 14 名）
	22	長岡京連絡協議会（於：当センター） 戸田遺跡（4.23 ～）発掘調査終了
	24	全国埋蔵文化財法人連絡協議会近畿ブロック埋文研修会（於：京都市・当センター開催当番法人）
	28	清野孝之文化庁調査官木津川市現場視察
	30	増田富士雄理事魚田遺跡（京田辺市）現地視察
	31	向日市文化資料館・向日市立図書館・当調査研究センター３館合同消防訓練 乙訓地域「応急手当講習」引原茂治、戸原和人主任調査員、鍋田幸世総務課主事受講

編集後記

情報107号が完成しましたのでお届けします。

本号では、最近、縄文時代の遺構が相次いで見つかっている乙訓地域における最新の調査成果を掲載しました。また、渡辺氏からは30年以上前の調査で出土した資料についての報文を投稿していただき、期せずして乙訓の縄文特集になりました。

シリーズ「遺跡でたどる京都の歴史」は、飛鳥・奈良時代を掲載しています。本書を片手に遺跡巡りをしてみてははいかがでしょう。

編集環境を少し整備し、過去の体裁にできるだけ近づけてみました。今後ともよろしくお願いします。

（編集担当　森島康雄）

京都府埋蔵文化財情報　第107号
平成20年12月25日
発行　（財）京都府埋蔵文化財調査研究センター
〒617-0002　向日市寺戸町南垣内40番の3
Tel　(075)933-3877(代)　Fax (075)922-1189
http://www.kyotofu-maibun.or.jp

印刷　三星印刷商事株式会社
〒604-0093　京都市中京区新町通竹屋町下ル
Tel　(075)256-0961(代)　Fax (075)231-7141

KYOTO
ARCHAEOLOGY CENTER

紫のゆかり、ふたたび

源氏物語千年紀